
ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穏なる世界！～

ころに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穏なる世界！～

【Nコード】

N9696Y

【作者名】

ころに

【あらすじ】

神様方の温情によりテンプレ通りの転生を果たした転生者Aが、ネギまの世界を出来るだけ平和にしようと仲間と共に世界を駆け回る！そんな感じの話です！なお、この作品にはTS等の要素が含まれております。閲覧の際にはそれらにお気を付け下さいませ。

第1話 新たなる旅立ち！神様は魚介類！？

■Side：????

視界を白が染め上げる。

どこまでも突き抜ける白。

まるで底の無い白色の奈落へ落ちていくようだ。
落ちているのか、浮いているのか解らない。

上下、左右の感覚も無い。

己が今何処を向いているのかも理解出来ない。
そんな空間に”私”の意識は浮いていた。

「で、転生して貰うぞい」

「展開はええな、お魚さん！？」

鯛が泳いでいた。

目の前に鯛が居たのだ。

そりゃあもう赤い鯛が居たのだ。

祝い事の席ならば皆が拍手喝采するであろう程の見事な赤。
それほどの色に引き締まった身を染めた、鯛が居たのだ。

「刺身……！」

「調理方法考え始めた！？」

「いや、ワイルドに焼き魚も良い！」

「やめたげてよお！」

鯛は白い空間でピチピチと跳ねながら叫んだ。
はて、と首を傾げる。

今更だが、鯛とは喋る生物だっただろうか。

答えは否だ。

つまり目の前の鯛は、鯛ではないのだ。
そう。言うなれば、

「刺身 or 焼き魚用宇宙人……！」

「調理するところから放れないかね!？」

とまあ、冗談はさておき。

「テンプレですね、解ります！」

「身も蓋もないのう!？」

カツと目を見開いて叫ぶと鯛も絶叫。
ノリの良い鯛様である。

成程。大体の経緯は理解出来た。

「貴方が神か」

「儂が神です」

やっぱり鯛は神様だった。
すごいなーかつこいいなーとか言っていると鯛様が仰け反った。
胸を張っているつもりらしい。

「それで、何時の間に私は死んだのでしょうか」

「いやついさっきテクノ——」

「（。。。）アーアーきこえない」

「……冗談じゃよ？」

冗談だったらしい。

流石神様だ。ユーモアに富んでいる。

「そんな事より転生じゃ！」

「オーケイ神様、成仏したいんだが駄目かい!？」

「ええ!?!いきなり投げ出した!？」

「諦めたらそこで成仏だよ……?」

「なに悟った顔で逝こうとしてるの安西先生!?!消滅しちゃめえええええええ!!!」

鯛様の尻尾でぺちぺち叩かれた。

くそっ、あまりの愛らしさに成仏を忘れてしまつとは、

「不覚……」

「ぜえ、ぜえ……は、話聞こうか、君い!？」

仕方ない。鯛様もどうやら必死の様だし、話を聞こうじゃないか。というわけで、自分が今どの様な体勢なのかも解らないが、胸を張ってみる。

気分はソファアに座って寛ぐマフィアの首領である。

「なんか偉そうな態度になつてる気がするぞい……魂だけじゃから体勢解らんけどな」

「気にせず先に行きましょう、鯛様」

「鯛様つて何!?!儂の姿確かに鯛だけどさあ!」

「いいから説明だ!」

カッと目を見開いて某バスケット漫画のテーピング推し選手みたいな顔になりつつ吼える。

鯛様もその勢いに押されたのか、むむむと唸ってから頷きを1つ。

「君にはとある世界へ転生して、これを集めて貰いたい」

「……黒い玉？」

「うむ、これはのう。僕らの力の結晶みたいなものじゃ」

「鯛様の力の結晶ですか。海産物パワー……！」

「儂、見た目鯛でも神様なんじゃないか……」

うむ、と鯛様がどこから取り出した”黒い玉”を観察する。

「なんというか、
」 闇のオーブ
「とかいう名前が付いていそうな玉
だ。」

オーラからして既に禍々しい。

「鯛様、まさか邪し——」

「そ
お
い
！」

「ほぼお！？」

サマーソルト尻尾が華麗に炸裂。

私は宙を舞う事となった。

いや、上下感覚も無いから気がただけだが。

「人間には邪悪に見えるが、歴とした神様パワーじゃ」

「そーなのかー」

「これを、君には転生した世界で探してきて貰いたい」

「ほうほう。クエストみたいなものですか。……報酬は？」

「集めまくと生き返る事が出来る」

「な、なんだってエ
ツ!？」

某MMRの様な陰影の濃い顔で叫ぶ。

魂だけなのそんな気がするだけだが。

「ふふふ、まあ、
君が死ななかつた場合」の世界へ意識を飛ばすだけじゃかな」

流石に死んだ事を無かった事にするのは無理じゃ、と言う鯛様。

「しかし、転生ってそんな凄いチャンスであつたんですか」

「いやあ、君達のような若い身空で死んだものだけじゃぞ？」

あと性格破綻者とかもお断りしておる、とは鯛様談。

実際そんなが送り込まれたら”黒い玉”集めどころじゃないだろう。

「つまり私は選ばれし者……！」

「殆どの若い身空で死んだ連中に各神様が聞いておるがの……！」

「Oh……」

当選確率100%という事実に白目になるが、鯛様は特に気にせず続け、

「で、”黒い玉”が多いのは、この辺の創作世界じゃな」

鯛様が尻尾を振ると、私の正面に1枚のウィンドウが開いた。

■選択可能な世界

- ・魔法先生ネギま！

- ・魔法少女リリカルなのは

- ・とある魔術の禁書目録

- ・TYPE-MOON系

「見事に魔法系ですな！」

「魔法系の世界は微妙に構築時にエネルギー食うしのう」

「というかアニメとかになつてるヤツばっかですね」

「お主が原作を知ってるのを選んだんじゃ。良い心遣いであろう?」

「なんで知ってるんですか」

「覗いたんじゃ」

「先生! プライバシーの侵害です!」

「この世界では儂がルールじゃ」

「くそう、なんてこつた! 神も仏も居やしねえ!」

「儂が神です」

「お前だったのか……」

阿呆なやり取りをしている間にも、次々とウィンドウが展開されていく。

内容は各世界の説明や、転生者の数。

他にはステータス面について、以下の様な説明があった。

■ 特殊能力の付与

・転生者のお決まりで、特殊能力を貰う事が出来る。世界を消し飛ばせる様なのは駄目。

■ 成長率の選択

・成長率『高』：大器晩成。鍛えれば鍛える程強くなれる。でも最初は弱い。

・成長率『中』：転生直後からそこそこの強さ。でも成長限界が決まっている。

・成長率『低』：最初から最強レベル。だけど鍛えても殆ど強くない。

強いというのは、ただ体が強いのではなく頭の良さ等も表しているらしい。

なんだかRPG用のキャラクターを作成している様な気分である。ふうむ、成長率については、やはり安定してそうな『高』か『低』

を選ぶべきか。

「じゃあ、まずは世界は何処にするかの？」

「ネギまで！」

「即決！？」

「後の候補だったリリカルは世界広過ぎだし！」

「他の2つは？」

「また死にたくないでゴザル！」

”ネギま世界”、”リリカル世界”は厄介ごとに関わらない限り、そこそこ安全な世界だ。

だが、”とある魔術世界”と”型月世界”は違う。

戦争が起きたり、実験台にされたり、吸血鬼がうるついたり。

選択肢を間違えれば即デッドエンドな結末が待っている確率が高いのだ。

そんな不幸を回避出来る連中が此処に来ると思えない。

よって、その世界達よりは安全そうな2つを選択。

更にそこから世界がそこまで広くない方を選んだ訳だ。

「死んでもそんなに損傷が酷くなければ再生させてやるがのう」

「なにその怪人っぽい不死身さ怖い」

「君は改造人間になるのじゃ……！」

「変身可！？」

「特殊能力にいかかがかのう」

「いらぬう！」

勝手に変なもんをつけられては堪ったものではない。
次へさっさと進むべきだろう。

「次は成長率じゃ」

「『中』で」

「えっ」

「『中』をお願いします」

「えっ」

「『中』で頼み申す」

「なん……じゃと……」

鯛様の顔に某スタイリッシュ死神漫画の如き陰影が付く。

「いや、よくよく考えたら、”黒い玉”集めるだけなら、そこなりの能力があれば……」

「ええ！？良いのか！？最初から最強！とか成長限界無しとか、男の浪漫じゃぞ！？」

「そんな事より”最初にそれなりの強さ”だ！」

「そこ！？」

「この強ささえあれば、病死なんてする事もないだろうし、幼年期は安泰！」

「なんとこの安全策！？」

「しかも成長限界があるとはいえ、成長する喜びが感じられるお得感……！」

「お、得……？」

ちよつと待て、と鯛様が背びれを向ける。

宙に揺れる尻尾がなんともチャーミングだった。

○

■ Side：鯛様

予想外である。

まさか成長率『中』を選ぶ剛の者が存在するとは。

……ぶっちゃけアレ、他2つを際立たせる為の選択肢なんじゃがのう……。

正直に言ってしまうと、殆ど細かい設定なんて行っていない。だって、選ばれた事ないんだもん。

……皆、『高』か『低』しか選はないしのう。

どうするか、今更細かい設定なんぞ出来ないし。ああもう適当で良いか。

この転生者も悪いヤツじゃない。ちよつとぐらい力を与えても悪用はしないだろう。ウインドウを目の前に表示し、設定を開始。

完了。

この間、僅か3秒。

鯛様の豪快さが遺憾なく発揮された瞬間であつた。

○

■Side:??? 転生者A

「じゃあ次は特殊能力じゃ。何が欲しい？」

「いらぬう！」

「ええ!？」

「転生はよ」

「ちよつと待とうかのう!？」

何故引き留めるのだ、鯛様。

「と、特殊能力じゃぞ!？男の浪漫じゃぞ!？」

「あの世界行けば、幾らでも特殊能力手に入るよ!」

「”王の財宝”とか”バスターマシン”とかはいらぬのか？」

「なにそれ殺傷能力有り過ぎ怖い」

「た、例えば、例え。で、何かないのかのう?」

「うーん、じゃあ……成長限界と最初からの強さの度合いを上昇…

…?」

「基盤強化するだけ!？」

「素の能力で圧倒、それもまた浪漫だとは思わぬかね……」

「ハッ!」

鯛様は私の言葉に驚いた様に目を見開き、マジで目から鱗を落とす。

鱗落として大丈夫か魚介類。

なにはともあれ、あと一押しっぱいので、心の中で拳を振り上げ、

「ただ1つの肉体で圧倒!そう!まるで某龍玉の如く!」

「少年漫画の王道じゃな……!この儂が間違っておったわ……」

鯛様は解ってくれたようだ。

彼はうんうん、と頷いてから、

「じゃ、リミッター色々外しておくぞい」

「えっ」

「某龍玉みたいなら限界は超えるものじゃろうがあ!？」

成長限界はどうした鯛様。

「良いからZ戦士だ！」

カッと目を見開きながら、某バスケ漫画のテーピング以下略。
まさか”あの作品”のファンだったのだろうか、この鯛様。
とりあえずもう駄目っぽいのでさせるがままにした。

「よし、リミッター解除成功じゃ」

「マジでやっちまったよ鯛様……」

「Z戦士故致し方なし……あ、あと原作じゃが別に介入しても構わんからな？」

「ん？」

思わず首を傾げてしまう。

原作ブレイクなんてして、良いんだろうか。

「今からお主が行くのは”ネギま！”という作品を元に構成された世界じゃ。想像の数だけその世界の数は存在しているからの。別に原作から外れても問題ないわい」

「そっぴや世界構築とか……実は凄い神様だったり？」

「妄想の世界具現化は格の低い神様の簡単なお仕事です」

「ソウデスカ」

思わず揃って白目を剥く。

なんか居た堪れなくなつた今日この頃である。

「じゃあ、転生じゃな」

「あれ？まだ容姿とか決定してないですよ？」

「この鯛様が既に決定しておる！安心せよ！」

「鯛様って自分で言った！？安心出来ねえ！？せめてヒント！」

「TSって良いよね！」

「ヒントは良いから結果を言えエ——！」

「ゆっくり原作介入していつてね！」

「この鯛様、最初から原作介入させる気満々じゃねえか！？」

鯛様が愛らしく身を跳ねさせる。

捌いてやろうか。

「よし、ある程度決まったところで”いつてらっしゃい”じゃな
「え」

瞬間、穴が空いた。

真下の空間、と思われる場所に黒の色が出現したのだ。

その現れ方は唐突で、この身にかかる重力が顕現するのもまた唐突であった。

そして私は落下した。

「サポートセンターは年中無休でくっついてるぞい！安心して頑張るんじゃぞー！」

「サポートセンター！？」

絶叫にも近いツツコミを最後に私の意識は、黒の一色に染め上げられた。

第1話 新たな旅立ち！神様は魚介類！？（後書き）

初投稿ですが、よろしければどうぞよろしくお願い致します。

まずは、お決まりの空間より落下系主人公で開幕であります。

第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！

■Side：転生者A

白の空間から一転、闇が世界を支配した。
広がる黒。

今度は沈んで行く感覚が身を包むのが、ハッキリと解る。
まるで深海へ沈み込んで行く様な重み。

だが、それは肉体が持つ重量だ。

その感覚が意識が認識した時、理解した。

肉体が、与えられた。

掌を握る感触が神経を走り、脳へと伝わる。

暗闇の中から、意識が、浮上する。

目覚めは一瞬だった。

「……！」

ごぼり、と口から気泡が漏れる。

何事と思う事も間もなく、状況は理解出来た。

液体の中にいるのだ。

目を見開き、周囲を見渡す。

薄い緑色の液体が全身を覆っている。

視界も同色に染まっていた。

不可思議な事態。

だが、意識は鮮明だ。

これが転生効果というヤツだろうか。

恐慌状態に陥る事もなく、此処がカプセルの様な物の中だと把握出来た。

「……」

成程、と頷きを1つ。

実験動物系の開始か、これは。

顔を上げると、潰れた女性の顔が見えた。

ついでに視線が合った。

……うわぁ。

なんか超目を輝かせた女性がこっちを見てる。

のぞき窓と思わしき所に彼女は顔を張り付かせていた。

元はかなり整っているであろう顔も無残に今は押し潰されている。

というか、目を血走らせてるし、鼻息荒くて窓白くなってるし。

こっち見んな。

……む、裸か!?

今更だが、自分が何も身に纏ってない事に気づいた。

視線を下ろせば広がるのは大草原。

Oh…なんというロリボディ。

身長も、大体の感覚でしかないが1mに届いていないんじゃないかな
ろつか。

完全に子どもである。

「あ、う」

声を出そうとしてみるが、ちゃんと発音出来ない。

ううむ、液体に浸ってるせいだろうか。

というか、のぞき窓に張り付いた女性が怖い。

こっちが動く度に恍惚とした顔を浮かべるな。

涎を垂らすな。手をワキワキさせるな。

そんな事やってると泣くぞ。すぐ泣くぞ。全力で泣くぞ。マジ怖いですからのぞき窓に頬擦りしないで下さい。

「……」

うへへ、と声が聞こえてきそうな女性の様子を見つつ、今後の展開を予想する。

判断材料は、危険信号の塊っぽい前方の女性。
相変わらず金の短髪を揺らしながら、のぞき窓に頬ずりしてる。
なんか煙出てるけど大丈夫なんだろうか。

……まあ、ネギま世界の住人だし大丈夫だろう。

多分ギャグ要員だろうし。

……現状は、恐らく研究員が実験動物が目覚めたのを見つけたって
トコロか。

しかし、実験動物が目覚めただけにしては、女性の奇妙過ぎる様
子が気になる。

私、実は結構重要な研究対象なんだろうか。

……とりあえず。

重要なのは、今の状況から脱出出来るか、否か。

『出来るぞい？』
「む」

鯛様の声？

『此処じゃよ、此処』

「何故、肩に……」

右肩に視線を向けると、半透明になった鯛様が張り付いていた。彼は右の胸鰭をヨツ、とでも言う様に上げる。

『サポートも神様の仕事じゃて。まあ、僕は分身みたいなもんじゃが』

おお、そこまでしてくれるのか。
神様って親切だなあ。
罵倒していたのがちよつと悪くなる。

「だがロリボディに、転生させたのは許されざるよ」
『ナイスチョイスじゃろ？』

キラッ と擬音が付きそうなウィンクを放つ鯛様。
やべえ殴りてえ。

『何はともあれ、脱出したいなら、前方の扉を殴ってみるが良いぞ？』
「ん？」

ふむり。鯛様はどうやら脱出の手引きをしてくれるつもりらしい。

「状況の説明は、してくれない？」
『僕もお主から離れられんし、起きたばかりで現状を理解はしとらんよ』

成程。別段良い方向へ導いてくれるという訳ではないらしい。
やりたい事を成す方法を教えてくれるだけという事か。

……とりあえず……。

のぞき窓が付いている部分へ視線を向ける。
その周りを見てみると、若干の窪みが枠を作っていた。
どうやらのぞき窓が付いている部分が、このカプセルの扉らしい。
なれば、鯛様の言う通り、

……殴る！

拳を引いてから、若干液体の中で体を捻り、回す様にして――、

「疾ッ！」

放つ。

○

■Side：研究員A

瞬間、偉大なるプロジェクトに参加する研究員A――プリオラは
狂喜していた。

何故かと言えば、その原因は目の前にある。

真白いカプセルに備え付けられたのぞき窓。

その中で、満たされた液体に浮かぶ様になっていた少女が、動いた。

”研究対象”兼”保護対象”である少女が”目覚めた”のだ。

計器の前で徐々に小さくなっていく心拍数を見た時、今回も駄目かと思った。

今までの努力は全て無駄だったのかと落胆した。
だが、心拍数が0になった瞬間の事だ。

「――」

計器の電源が落ちた。

魔力によってサポートもしていた筈のそれが、唐突に反応を無くしたのだ。

正直こちらの心臓が止まったかと思った。

生命維持装置まで電源が落ちていたら、という考えが脳裏を過ぎったからだ。

慌ててカプセルまで走り、のぞき窓の中へ視線を移し、

「……」

「……」

こちらを見ている幼い少女と目があつた。

橙色の長髪を液体の中に泳がせる少女の視線は凜々しく、ハッキリとしていた。

間違いない。

生きてる。

「……っ！」

感動の余り、声を上げてしまった。

何事かと周りの研究員が視線を集めてくる。

だが、気にはならない。

「やった……！やったのよ……！」

もう嬉し過ぎてのぞき窓越しに頬擦りしてしまう程だ。

ああもう目覚めたなら目覚めたと言ってくれば良いのに。

人を心臓止まらせる程驚かせてから、幸せプレゼントとか御茶目さん！

うへへ、と涎が流れるがスル！。

早く外に出してあげたい。

そしてこの手で抱きしめて、直に頬擦りだ。

そりゃあもう実の娘の様に可愛がってあげるんだから！

「でもその前に各種チェックね！ああでも離れたくない！」

カプセルにこのまま張り付いて一晩を過ごしたい気分だ。

徹夜続きのせいで寝不足だが、それすら苦にならない。

よし決めた！今日はこのまま一晩中一緒に居てあげ――、

「ん？」

何かカプセル内で動きがあつた。

少女が体を捻っていたからだ。

運動がしたいのだろうか。

……ふふふ、安心なさい！ここから出たらいっぱい運動させて――
！。

そんな風に未来設計が脳裏を過ぎった瞬間だった。
のぞき窓内で、少女の姿がブレた。

「およ？」

愛しの少女の姿が遠ざかっていく。

何故か。

簡単だ。

のぞき窓の付いている扉が吹っ飛んだのだ。

ついでにその扉に張り付いてた自分も吹っ飛んだのだ。

実に解りやすい。

しかし、

……ああ、拳を突き出す姿もとってもプリティよ！

次の瞬間、ぶぎゅっと声を上げてしまった。

唐突な衝撃が脳を揺さぶる。

勢い良く壁に叩きつけられた彼女は、しかし、最後の根性で、

……ナイス正拳突き！

親指を立てたジェスチャー。

ありったけの賞賛を少女へ送りつつ、壁と扉に挟まれたまま気を失った。

○

■Side：転生者A

目の前で、べちゃっと音を立てて女性が床に落ちる。

なんか幸せな表情で落ちたし、多分大丈夫だろう。

「……凄いパワー」

『じゃろ？成長率『中』は伊達じゃないぞい』

右肩の上で、嬉しそうに語る鯛様。

ていうか、本当に『中』なんだろうか。

なんか凄い勢いでカプセル破壊されたんだが。

『『高』だったら今のでカプセルなんぞ跡形も残らんわい』

「なにそれ怖い」

『中』を選んで、本当に良かったと思う。

さて、と液体の流れた出たカプセルから外へ足を踏み出す。

液体が無くなった分、余計に身体が重く感じる。

だが同時にそれは、生きてる感覚も与えてくれた。

……ああ、生き返ったあ。

んーっと体を伸ばしてから、首を左右へ傾ける。

骨が鳴る快音。

続けて周囲を見渡せば、啞然とする白衣を着込んだ女性が数人。

「……」

『……戦闘員では、無いようじゃのう』

視線を向けると、肩を跳ね上げる女性達。

表情から見るに、怯えているのだろう。

「ん」

一息。

ただそれだけの行為。

だというのに、女性達は部屋の隅まで猛ダッシュで避難した。
え、何その怪獣から逃げる様な全速力。

「……………」

『フハハハ！怯えろお！竦めえ！研究成果を活かせぬまま死んでゆ
けえ！』

しかしこの鯛様ノリノリである。
とりあえず鯛様の腹を叩いて、

「説明はよ」

『お？説明？』

「現状を、把握したい」

『なんかお主口調が平淡になってるような気がするんじゃが…………』

なんか話すのが難しいのだ、このボディ。
顔が硬いというか、なんというか。

『まあええわい。まあ、正直儂にも解らん。儂、お主の容姿を設定
しただけじゃし』

「容姿……………」

『うむ。そのの鏡を見てみるが良いぞい』

鯛様が指差す先には、全身を映すタイプの鏡が1枚設置されてい
た。

壁に掛けられたその鏡には、1人の少女が映っている。

まあ、私の事だ。

少女なのは諦めた。

鯛様が勝手に選んじやったし。

生き返れたのには変わりないんだから、許容範囲である。

問題は――、

「アス、ナ……」

チビ明日菜だ。

完全にチビ明日菜である。

原作でもチヨコチヨコ出ていた我らがヒロイン明日菜の幼年期である。

しかも昔の無表情モード。

試しに笑ってみようとしたが、表情筋が死んでいるかの様に動いてくれなかった。

まさに鉄壁フェイスである。

……Oh……。

なんとという鯛様でしょう。

原作キャラの中でも超重要キャラ似ボディにしてくれるとは。

これには匠——もとい、私も内心苦笑い。

というか研究対象にされてたとか、正直嫌な予感しかない。

『ううむ。明日菜似と設定したは良いが、こんな状況になるとは』

もう少し細かな設定しておくべきじゃったのう、と鯛様は顎を鰭でなぞる。

「……」

『むむむ』

とりあえず、現状の理不尽さに涙が出そうだったので鯛様の頬を突いておいた。

……とりあえず、今必要なのは。

周囲は女性ばかりとは言え、何時までも裸体を曝してる訳にもいかまい。

ええ、予想外ではあるが、同性とは言えだ。

つまり、今必要なのは、

服

┐
?
┐

出て行った。

名も知らぬ研究員さんよ、頑張れ。

その様な意思を乗せた慈愛の視線を研究員の走り去った扉へ向けていると、

不意に肩に布の感触が降りてきた。

振り向いてみれば、肩程まで緑色の髪を伸ばした女性が居た。
その姿は灰色のスーツで、白衣は着ていない。

「え、えっと、寒いでしょう?」

女性は、こちらの肩に自らの白衣をかけてくれたのだ。

彼女は強張った表情を浮かべつつも、こちらを心配してくれている様子であった。

……なんと。

優しい女性だ。

私が男のままであつたならば即座に惚れ込んでいただろう。
現在は同性なのが悔やまれる。

「……ありがとう」

「えっ!? あ、は、はい……」

白衣で身を包み、再度周囲を見渡す。

様々な機器が部屋に所狭しと配置されている。

そして、部屋の最奥には先程破壊してしまった白いカプセル。
所々から煙を上げ、液体を噴き出している。

部屋の広さは、一辺が7 m以上はあると思われる正方形。

高さは4 m程か。

部屋の中に存在する研究員と思わしき女性は4人。

1人は緑色の髪を肩まで伸ばしたスーツ姿の優しき女性。

もう2人は部屋の隅でガタガタ震えている。

金髪のデコ見せヘアと前髪で目を隠した黒髪の2人組だ。

ちなみに2人とも灰色のスーツに白衣といった出で立ちをしていた。

緑髪の女性もそうだし、此処の制服だったりするのだろうか。
ちなみに最後の1人は扉の下敷きになっている金髪だ。

「あの人」

「え？ああ、か、彼女？多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だし」

亜人？

という事は此処は魔法世界か。

良く見てみれば、緑髪の女性も額に1対の白い角が生えている。

「……」

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら？」

「何も」

困った様に口元に手を当てつつ、女性はこちらを見てくる。

ぶっきらぼうな口調になってしまふのはなんとかならないだろうか、マイボディ。

『クールな女子って良いもんじゃよね！』

「神様エ……」

「？」

右肩でピチピチ跳ねる鯛様はスルー！。

とりあえず女性に頭を下げて、白衣のボタンを留め、回れ右。視線の先で目を回している金髪を救う為に歩き出した。

。

■ Side：緑髪の亜人研究員

何時もは静かで退屈な研究室。
その変化は本当に唐突だった。

「へ？」

私はその瞬間、間抜けな顔をしていたと思う。

目の前で、ちよつと特殊な趣味を持つ女性が宙を舞っていたのだ。
しかも、頑丈さが売りであった筈のカプセルの扉と共に。

……あつれー？あれって”ラカンが殴っても大丈夫！”っていうのが売り文句じゃ……。

視線を件のカプセルへと向ける。

水音を響く。

音は、幼い少女の歩みによって発生しているものだった。

濡れて重くなった橙色の長髪を揺らしながら、彼女は足を進める。
カプセルから軽い動きで出て来た彼女は周囲を少し見回すと、

「ん……」

自分の頭上で手を組み、全身ごと天に向かって伸ばし始めた。
更に身体の調子確かめるかの様に各部を肩を回し、手を開閉する。

そうする事、数分。

研究室に静寂が訪れる。

怖い。

目覚める筈がない欠陥品。

それが、彼女の呼び名だ。

私達は暇だから、特にやる事もない部署に飛ばされただけだった筈。

書類の山から解放された、平和で優雅な日々が送れる筈だったのだ。

だが、その”筈”はいとも簡単に打ち砕かれた。

欠陥品と呼ばれた少女は今、目を覚まして、目の前に存在している。

その能力は一国を滅ぼしうるといふ伝説の力を秘めた少女が、だ。

「――」

不意に少女の視線が、こちらに向いた。

「ひっ」

「「ひいひいひい！」」

「ちよっ、おまっ！」

最初の私の怯えを切っ掛けに、他の研究員が全力で壁際までダッシュしていった。

おのれ、私を置いていくとは後で酷いぞ貴様ら。

約1名逃げ遅れが居たが、彼女も近くの壁に張り付いて、移動を開始。

どうやら恐怖の権化である少女の後ろを通って扉まで辿り着くつもりらしい。

「アス、ナ……」

「!？」

この子、オリジナルの名前を!？

まさかオリジナルの記憶まで持っているというのか。
となると色々過去に酷い目にあっていたという話だし、

……生き残れる気がしない!?

今までの恨み!とばかりに虐殺される未来が脳裏を過ぎる。
すいません、母様、父様、娘は親孝行があまり出来ない娘でした。
ほろり、と頬を一筋の涙が伝う。

歪んだ視界の端では、隙について脱出を試みた同僚が少女に服を
要求されていた。

背を向けている筈なのになんで気づけるんだ、あの少女。
殺気に思わず涙目になりながら、扉を乱暴に開けて全速で退出す
る同僚。

というか、あの幼女マジで怖い。
目が完全に殺し屋のそれである。
幼いながらも鋭い目つき、一切変化のない表情。
その上で滲み出るあの威圧感。

「
……」
「ハッ!?!」

威圧感が薄らいだ、と思えば少女の視線の向く方向は、研究所の
出口。

同僚が今さっき服を探しに飛び出した、ある意味楽園への入り口
だ。

……まずい!数秒しか経っていないのに怒ってらっしゃる!?

このままでは八つ当たりで殺られる!?
そう思うと行動は速かった。

そう。逃げれないなら、立ち向かうのみ。
怯えに震える足をなんとか動かしながら、1歩、2歩。
なんとか少女へと近づく。

そして、己の白衣を脱ぎ、彼女にかける。

「？」

少女の意識が向けられる。

氷に様に冷たい視線。

思わず目を背けたくなるが、全力でその欲求を抑え、微笑む。
ぎこちなくなっただが、お願いだから看破しないで下さい。

「……ありがとう」

「えっ!？」

思わぬお礼に目が点になる。

え、もしかしてこの子、意外に、普通の子？
外はクールで中身はほっこりって感じなの？

「あ、は、はい……」

だが油断は禁物だ。

迂闊に砕けた態度をとったらカプセルを破壊した攻撃が飛んできかねない。

ここは慎重に、礼を失さない様に頷く。
声が強張るのは仕方ないだろう。
だって怖いんだもの。

「あの人」

「え？ああ、か、彼女？多分、大丈夫だと思うけど……一応亜人だ

し」

カプセルの扉に押し潰された金髪を見る。

時折頭に生えた角が動いてるし、大丈夫だろう。

亜人という種族は総じて頑丈なのだ。

私も幼い頃からこの頑丈な身体には何度も助けられたものだ。

……うおっ、殺気！？

寒気を感じて少女に視線を戻すと、彼女はこちらをジッと見ていた。

あ、死んだ？なんか知らない内にバッドエンドフラグ立てちゃった？

「ええっと、何か私の顔に付いてるかしら？」

「何も」

何でもないならその殺気を向けるのを止めて！

「神様……」

「え？」

ぽつりと呟くと彼女は背を向けて、倒れ伏す金髪へと向かっていった。

なんか片手でとんでもなく重い筈の扉をぶん投げたりしてたが、気にしたら負けだ。

しかし、今の呟きは一体。

神様、という単語が、何を意味しているのか。

……どういう事なの。もしか、神様への恨み言……！！？

神様は、なんでこんな世界に私を生まれ落ちさせたの？

死ぬ方がマシなくらい辛い思いをするなら生まれない方が良かった！

こんなにも苦しいなら、こんなにも悲しいなら……世界などいらぬう！

ズビズバギャー。

……スプラッター……！

脳裏では血塗れの少女が狂気に満ちた高笑いを上げつつ、自分を虐殺中である。

……絶対に彼女の機嫌を損ねてはいけない！

私は心の中で強く決意するのであった。

○

■Side：転生者A

数時間後。

何故か私は研究室らしき場所とは別室に居た。

「わぁ、服似合ってるわよー」

「ん」

そして着せ替え人形にされていた。

目の前に居るのは金の短髪をいやんいやんと揺らす女性——プリオラだ。

先程、吹っ飛ばしてしまった彼女を助けたのだが、

……まさか自己紹介された上、お詫びに服を用意する、とか言われるとは。

ちなみに叫んで部屋を飛び出して行った研究員はスク水を持ってきた。

即座に近くにあったランプで焼却しておいたが。

『似合ってるのう。というか恥じらったりせんのか？』

十分恥ずかしいツスよ、鯛様。

ただどうあがいても表情にそれが出ないだけだ。

何この鉄皮面。

ていうか、鯛様他の人には見えてないんスね。

さっき皆の反応を見て漸く気づきましたよ。

……しかし、あんまり”女”になっただっていう実感がないなあ。

元々それが自然であつたかの様な感覚。

なれば、現状を受け入れる事も簡単だ。

……うーむ。確かに”私”は男だった筈なんだが。

記憶を探ってみれば、確かに過去の己は男だった。

常にマッシブなボディを目指して肉体を苛め抜く日々を送る益荒男。

そんなナイスガイが、過去の己。

今やその片鱗すら消し飛んだボディではあるが。

……む。新しい服か。

プリオラがハンガーラックから新しい服を取り出してくる。
勿論、満面の笑みを浮かべながら。

というか、この部屋、なんか凄い少女趣味な服多くないか？
しかも全部私のロリボディにピッタリなサイズである。
明らかに元々用意してあっただろ、コレ。

「やっぱりスカートが似合うわね！うん！」

彼女は白衣の裾を派手に揺らしながら、頬に両手を当ててくねくね。

恍惚とした表情が怖い。

……なんで着るのも自然に出来るんだ？

着せられたプリーツスカートの裾を持ちながらヒラヒラと振って
みる。

落ち着かない気分ではあるが、特に嫌という訳でもない。

『むう、肉体への最適化が過剰に行われておるのかもしれないね』

鯛様が不穏な事言いながら、首を傾げる様に身体を捻った。
なんとという可愛らしい動作か。

「後はこの上着を着れば完成ね」

ふとプリオラの声に振り向けば、彼女の手にあるのは民族衣装っぽいもの。

それは、地面まで届きそうな長い裾を持つ、ワンピースの様な服

だった。

ただし、スカート部分は前の方が大きくカットされており、足が見えている。

胸元から二の腕辺りまで模様が入っており、それがアクセントとなっていた。

……って、それ、チビアスナが捕まっていた時に着てた服じゃ。

下にプリーツスカートを履いているという差異はあるが、大体同じだ。

「ふふふー、大戦期の極秘資料を見て、写真の服に合わせて用意したのよ！」

貴女には何の事だか解らないでしょうけどー、と彼女は苦笑する。いや、解りますけど。

というか大戦期の極秘資料を見てって、実は相当偉い人なのか、この人。

「さあー、ドンドン着せちゃいましょうねー」

「……任せる」

「任されたわ！」

輝く瞳が標的（私）をロックオン。

まあ、折角選んでくれてるのだし、悪い気はしない。ヒッハー！と上着を私に着せていくプリオラ。

そういえば他の研究員は何処に行ったのだろうか。

『記憶を持つてるとか、上に報告とか何とか言っただけで行きおったぞい？』

「……」

上司に研究対象が目覚めた事を報告、という事だろうか。
だとすると、早めに脱出した方が良いな。

……プリオラさんには悪いけど、実験動物はマジ勘弁だからな！

服とか色々貰っておいて、薄情だとは思うが命には代えられぬのだ。

誰に言われなくてもスタコラサッサだぜ！

「あとはー。あ、ツインテールね！念願のツインテールが出来るわ
！」

響きのに殺してでも奪い取られそうなツインテールだな。
しかし、嬉しそうに髪を弄るなあ。

「……ねえ」

「ん？なあに？というか、そっちから話しかけてくれたの始めてね
！？嬉しいわ！」

「なんで……私に良くしてくれるの？」
「なんでって……」

んーそうねえ、と彼女は困り顔で頬を掻く。

「私、貴女が起きるのをずっと待ってたのよ」
「起きるのを？」

「うん。もう2年くらいになるかしらねえ」
「長い」

「そう。随分長い間待ったわあ……」

プリオラは、溜息を1つ。

「でも今はこうしてお話出来てるし、待った甲斐はあったというもののね!」

「……」

やばい。この人凄く良い人なんじゃ。

ほら、もしかして私の勘違いで、この人達は私を保護してくれてただけ――、

「でも暫くしたら、貴方も本国に行かなきゃいけないだろうし……」

淋しいなあ、とはプリオラ談。

それを聞いて、内心は凄く良い笑顔で頷きを1つ。

「うん」

よし、パパン張り切って脱出しちゃうぞー。

本国送りとか嫌な予感しかない。

某アルター使いが『ハンマー!』しか喋れなくなるくらい嫌な予感しかない。

そうと決まればやる事は1つ。

……鯛様、この辺りの地図とか、今何年とか解る?

『む?そのくらいなら本体から情報をダウンロード出来る筈じゃない?』

本体って何?あの白い空間の鯛様なの?いっぱいいるの?養殖なの?

それはともかく、ならば問題無し。
逃走資金と逃亡先の確保は――、

……魔法世界なら狩りとかで生活分は確保出来るよね、うん！

楽観的な思考でスルーする事にした。

あんまり考えてるとドツボにはまると思ったからだ。
人生、要所要所では気楽に行くのが一番だよな！
強化された身体もあるし、何とかなるさ！

「よーっし、ツインテール完成よ！」

「……ありがとう」

本当に嬉しそうな声。

罪悪感が胸を刺す。

でも悲しいけど、これって実験動物生活から逃亡する為なのよね。

「ねえ」

「ん？ なあに？」

「外、出たい」

「あら。もう？ でも色々検査が……」

「お願い」

「……ちよつとだけよ？」

ツインテールを翻し、振り向きからの上目遣いコンボ。

こうかはばつぐんだ。

相変わらず無表情だけど。

『元男なのに上目遣いを使いこなすとか、恐ろしい子……！』

白目剥いた鯛様は無視した。

一発でノックダウンされたいらしいプリオラに手を引かれて廊下に出る。

そのまま数分歩いて、外へ。

「さあ、ついたわよ。ここがお外。貴方は……初めてよね？」
「……」

凄い。

初めに抱いた感想が、それだった。

チープな言葉でしか表せないが、とにかく、凄い。

白亜の研究所らしきものを背に、私達は広い庭に居た。
庭と言っても仕切りなどがある訳でもない。

その代りに、

「その森、危険な動物は住んでないけど、1人じゃ行っちゃ駄目よ？」

庭を区切る様に、森が広がっていた。

高く背を伸ばした木々が構成する森だ。

草原の様な庭と、森の見事に組み合わせられた風景。

綺麗だった。

自分の居た国では、滅多に見られない光景だ。

同時に、それらは此処が別世界なのだという事を視覚的に教えてくれた。

天然のそれらは、人工的な物を見慣れていたこの胸を震わせてくれる。

……って、そんな事してる場合じゃないよな。

強化された目を凝らすが、奥が見えない。
結構深い森らしい。

……行ける？

『ふむ。危険な獣も居ない様じゃし——行けると思うぞい』
ならばよし。

「でも遊び道具がないわね！……何か取り寄せようかし——」
「プリオラ、さん」

「ん、今、名前で……？えっと、なあ」

「ごめんね」

彼女が『なあに？』と言い終える前に全力ダッシュ開始。

「え」

呆然とした声が背後から響いた。

最初は殴ったりして気絶させようかと思ったが、

……下手に殴って潰れたトマトにしてしまったら嫌だし！

この肉体、スペックがとんでもない。

さっきもプリオラに隠れて鉄製のパイプを握ったら、

……見事に握り潰せたしな。

武術の心得もそんなにない自分では上手く気絶させられるのかも
解らないし。

……三十六計逃げるに如かず——ッ！

『それでいいのか主人公』

主人公じゃねーし！

私には脇役がお似合いだし！

というわけで、プリオラ殿、サラバダー！

「——！？」

後ろから叫び声が聞こえてきて若干胸がチクリとするが、今更止まらない。

そのまま私は森に飛び込み、走る。

振り返る事は、無かった。

第2話 いざ新天地！生誕の地よサラバ！（後書き）

生誕の地（約数十分）。

感想などがありましたら、ぜひよろしくお願い致します！

■以下、主人公設定図

> i 3 6 0 6 0 — 4 5 1 4 <

物理殴打系ヒロイン兼主人公 ——— ツ！

第3話 指針決定！そして新たな力！？

■Side：転生者A

「まさかの爆弾……」

「だが散弾ではなあ！」

全身からシュウウと煙が上がる。

強化ロリボディでなければ即死だった。

……走ってたらいきなり足元が爆発するとかもうね。

魔法世界なのに地雷つばいのとかどうなんだ。

しかも散弾式とか殺す気満々ですぞ。

なんか弾が光ってたからもしかしたら魔法なのかもしれないが。

「しかしまだ数時間も経っていないのに、気の使い方が上手いのう」
「咄嗟に、鯛様助けてくれた」

鯛様が言った通り、全身に膜を張るイメージを浮かべなければ、

……今頃ミンチより酷えや状態になってたよ！

見れば、自身の身体を薄く金の光が覆っている。

これは、念とかそういうのだろうか。

先程の攻撃を防ぎ切ったのも、この金の光だ。

服にすら傷一つない。

凄いの使える様になっちゃったな、自分。

……数時間前まで普通の生活してた筈なんだけどなあ。

まさかこんな不思議パワーが使用可になるとは。
現実離れた事実を確認すると同時に、自分が1度は死んだ事を
思い出す。

「痛ッ」

一瞬、脳裏にチリリと火花が散る。

……何だ？

頭を振ると頭痛は消えた。

いや、それより今は目の前の光だ。

輪郭に身を包むそれは動けばキチンとついてくる。

軌跡に残像を残しているのが、地味に感動だ。

1回くらいなら転生もしてみるもんである。

ちゃんと仕事すれば、生き返れるらしいし。

もしかして凄く貴重な体験をしているのではなからうか！？

……まあ、死んだからだけどな！

発生条件がリスクー過ぎるのが玉に瑕である。

と、そんな事を考えている場合ではなかった。

体勢を立て直さねば。

「んっ」

防御は鉄壁でも、中身は素人なのだ。

閃光に驚いて思わず転んでしまっても仕方ないだろう。

というわけで、立ち上がり、手を2、3回開閉する。

「うん……問題ない」

『ああもあっさり防御するとは思わなかったが、やるもんじゃのう』
「鯛様のおかげ」

鯛様の言葉に感謝の言葉と頷きを返して、再び走り始める。
否。

その動きは走るといふよりも、跳ぶといった表現が正しいか。
さっきのような爆弾を警戒して、木の枝と枝をジャンプして渡る
事にしたのだ。

枝と言っても、太い。

どれくらい太いかと言うと、現在の自分の胴回りよりも太い。
ちみっこい自分が乗ったところで、折れる心配はないだろう。

……前までだったら絶対やろうとも思わなかったよなー。

つくづく人間離れしたもんである。

『このまま真っ直ぐ木の枝を今のペースで渡り続ければ、数十分で
森を抜かれるぞい』
「ん。頑張る」

言葉と共に、跳ぶ。

顔を撫でつける風が結構気持ちよかった。

○

森を脱出し、1日が経った。

朝である。

え？展開が早いって？細けえ事は良いんだよ！
さて、朝までの間、私が何をやっていたかというと、

『あのキノコは食えるのう』

「いただく」

茸採り等、アウトドア生活を楽しんでおりました。

『まあ、行く宛が無いとも言うがの！』

「気にしない」

此処は研究所らしき場所を覆っていたかなり広大な森を抜け出てから、道なき道を更に数時間走った場所にある渓谷だ。

命からがら畏だらけの森を突破してきた先にこの様な場所があったのだ。

左右を見れば頂点が白い雲に覆われた山々が織りなす絶景が広がっていた。

『しかしこれからどうするんじゃ？』

「……目的は決まってる」

座ったままの体勢からキノコを握って立ち上がり、

「後は、今から考える」

『結局行き当りばったりだった！？』

いや、後先考えず飛び出たし。

その結果だし、現状は自業自得だ。

まあ、鯛様が居るから淋しくないし、生活の為に必要な助言まで

してくれる。

あんまり不自由ではないのが現状だ。

『しかし、目的とは？』

肩の上で鯛様が首を傾げる様に身体を捻る。
それに対して私は頷き、

「黒い玉集め」

『うむ。当初の目的を忘れてないのは良い事じゃ』

うんうん、と鯛様も頷きを返してくれる。
それに対して、私は右手の人差し指を立てて言葉を続けた。

「あとは、ネギを、出来るだけ平和に過ごさせる、のだ」
『……ん？』

え。何故訳が解らないよ、みたいな顔をするのですか。
原作介入しても良いよ？って言ったの貴方でしょうに。

『いや、しろとは言ったがの……何故ネギを平和に生きさせる方向
なんじゃ？』

「……可哀想」

だって原作時、数えて10歳ですよ、あの子。
凄まじいまでの天才なのは原作見れば解るが、

……あの歳で世界を救う為に命賭けたり、人間を止めちゃったりと
かねえ。

自分の住んでいた国なら、楽しく友人達と遊んでいるであろう年頃だ。

だから、

「ネギが、平和に暮らす世界があっても、良い」
「……」

何故ポカンと口を開けてるのですか、鯛様。

『めつずらしいタイプじゃのうお主……』

「……そう？」

『“ネギ坊主を平和に暮らせる”の願いなんぞ、初めて聞いたぞい？』

「そういう転生者が居ても良い……」

自由とはそういう事だ、と心持ちハードボイルドな感じで笑みを浮かべる。

浮かべたつもりだけで、表情は全く動かなかったが。

おのれ鉄壁フェイス。

『まあ、ぶっちゃけ本人に希望を聞いた訳でもない押し付けじやがの』
「ぐ」

ぐぬぬ……そりゃ解ってるのですが。

”漫画の世界”に来たって言っても、そこで生きてる人達は本物だ。

自分がやろうとしている事は、他人の人生を好き勝手に左右する様な事なんだから、

良い事でないのは確かなのけども……。

……子どもが痛い目にあうのが解ってるのに、放ってはおけないよなあ。

頬を搔いて、鯛様へどう答えたものかと脳を働かせる。
が、返す言葉を聞く前に鯛様はコチラの肩へ貼り付き、

『まー、僕は嫌いじゃないがのう。そういう考え方』
「……」

どうやら考えを読まれていたらしい。
肯定してくれる人が居るだけでも、大分楽になる。

……うん。どうせやるなら、確り腹を括って行こう。

その途中で何があったとしても、自己責任だ。
それだけは覚悟しておこう。

『で、具体的にはどうするんじゃ？』

「今は、原作の何年前？」

『待て。確認する』

鯛様が空を見上げて何かと交信を開始。

あれ、もしかして本体と交信してるんだろうか。

『うむ。解ったぞい』

暫くして、鯛様がふわりと宙を一回転してコチラを向く。

『今は原作開始の6年前じゃ』

思わず内心で感激の声を上げる。

なんとも良いタイミングに転生してきたものだ。

だが、まだ確認しなければいけない事が残っている。

「ウェールズ、襲撃は？」

『まだの样じゃな。季節的にウェールズは今、1月中旬、冬真つ盛りの样じゃのう』

「……あまり、時間が無い」

タイミングが、ちょっと良すぎた様だ。

今からウェールズ襲撃を防ぐとかかなり無理があるんじゃないかなるか。

まず、ネギを平和に過ごさせる為には幼少期のトラウマを失くす必要がある。

でなければ、父親の影を我武者羅に追いかけるのは既に明白なのだから。

……しかし、幾らタイミングが良くつても大き過ぎる問題だな、これ

なにせよ自分の現在地が悪すぎる。

……魔法世界からじゃ、移動手段が限られてるよな。

ゲートとかゲートとかゲートとか。

主要な都市にしか無いとか、交通が不便過ぎる……。

いや、そもそも魔法世界の住人の殆どは使わないんだろうけど。

「ゲート、使える、かな？」

『無理じゃないかのう……少なくとも資金が必要じゃぞい。あと身分証明証もな』

「……ない」

『ふむ。現実世界へ行く手段がない訳でもないぞい？』

「！？」

目を見開いて鯛様へ視線を向ける。

『フッフッフ、驚くでないわ。儂、神様じゃぞ？』

ドヤア……とばかりに胸を張る鯛様。

良いから情報早よ下さい。

『つれないのう……まあ良いわい。その手段とはのう』

「とは……？」

『黒い玉のパワーを使って、無理矢理その場にゲートを開く！』

「黒い玉持ってない」

『安心せよ！』

というか、黒い玉使って良いんだろうか。

などと半目になりながら思うが、鯛様は構わん！行こ！とばかりに飛び跳ね、

『ここから西へ数km進んだ地点に黒い玉の反応があるのを感知済みじゃ！』

「リーダー機能……？」

サポート機能充実し過ぎだろう、この神様……。

『お主、選んだ能力も欲が無いもんだったからのう。これくらいオ

マケじゃて』

「ありがとう」

『うむ』

喋りながら歩いて、川へと向かう。

「とりあえず、腹ごしらえ」

『焼きキノコ！焼きキノコ！』

「……」

アンタも食べるんかい。

○

■Side:???

1本のタバコを口に加えながら、僕は眼前の残骸を見つめていた。その残骸は、元は白いカプセルだった。

僕達が数年前に”とある組織”の研究所から救い出した少女のベツトとなっていた筈のそれは今は見るも無残な姿と化していた。

無理矢理内側から破壊されたせい、外殻が歪んだり、割れたりしていた。

しかも所々から液体が漏れたり、火花が上がったりまでしている。一体どれだけの力で扉を殴ったら、こんな壊れ方をするのだろうか……。

「本当に、すいません……」

「いや、君だけのせいではないさ」

灰色のスーツの形を整えながら、背後から聞こえた声に振り返る。そこにいるのは、頭に1対の角を生やした金髪の女性だ。

スーツの上に白衣を着た彼女——プリオラは深々と頭を下げていた。

それに対して僕は手を小さく振り、頭を上げるのを促すと、

「プリオラ君。彼女が居なくなった時の状況を詳しく教えてくれ」

「はい……と言っても私も、未だに良く解っていないくて……」

「解っていない？」

「ええ、本当になんの前触れも無く飛び出していったんです」

「……本当に何も無かったのかい？何かに操られている様子は？」

「いえ、終始楽しそうな表情で……」

彼女の発言と同時に、後ろで機材を片付けていた緑髪の研究員がこける。

確かに、液体が垂れ流しになっているせいで滑りやすくなってるしなあ。

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫ですっ！ええ、大丈夫ですとも！」

声をかけると彼女は慌てて立ち上がり、頭を下げて部屋を出て行った。

なんで主任がおかしくなったア——！とか悲鳴を上げてたのだからか。

「……元気だね」

「ええ、昨日から特に」

やっぱりあの子が起きたのが嬉しかったんじゃないか、と彼女は微笑む。

が、それも一瞬ですぐに眉尻を下げた表情になり、

「あの、あの子の行先とかはもう解ったのでしょうか……？」

「ああ、向かった方角は解ったんだけどね……」

「本当ですか!？」

「この研究所周りの捕縛用の罠が幾つか起動していてその軌跡から方がうオ!？」

……ネクタイが引つ張——って、怖ッ!? プリオラ君の眼が光って、怖ッ!?

「罠が起動してたって何があつたんですか!？というかこの研究所の周辺の罠は”危険度が高い侵入者にしか発動しない”って話じゃなかったんですかまさか業者が不良品送ってきてたんですか!？あの野郎どももしあの子に怪我とかさせていたらハッキングしてデータを全て『ドキッ!男だらけの青春』暑苦しい目眩めく一幕』に置き換えてやる……!しかも全部映像データの顔部分を貴方に置き換えた上でよ!？」

「僕まで被害者予定リストに含まれてる!？」

「ちよつと顔の写真プリーズ!あ、悶えた感じのヤツとかあるとベネね!？」

「その話聞いた後で提供すると思ってるのかい!？」

暫しの取っ組み合い。

僕、WIN。

「と、兎に角彼女の向かつてる方向は解ったから後は僕達に任せておくんだ」

「ぜえ……わ、解りました。でも、何か進展があつたら……」
「ああ、勿論連絡するとも。僕もこれから搜索に向かうしね」
「え？貴方まで、ですか？」
「こつ、冷静に見せようと頑張ってるけど。内心、彼女が心配で溜まらなくてね」

頭を掻きながら、苦笑を浮かべてしまう。

「そう、ですか……すいません。気を遣わせてしまつて」
「いや、君と話していると僕も幾分か落ち着いてくるよ」
「む。私の慌てっぷり、そこまで酷かったですか……？」
「違う違う。そういう訳じゃないさ」

手に持った煙草の火を携帯用灰皿へ突っ込んで消し、

「あの子をここまで心配してくれる人が居て、安心出来るから、かな」

その言葉を最後に僕——高畑・T・タカミチは出口へ向けて歩き出した。

○

■Side：転生者A

「何か、渋い兄さんに心配された気が」
『お主は一体何を言っているんじゃない』

走るー奔るー俺ーたーちー」

鼻歌混じりに無表情な影が山に行く。

山と言っても見渡す限り岩、岩、岩。

見事なまでの岩山だ。

癒し要素の緑の欠片もあつたもんじゃない。

「こつち？」

『うむ。向こう側じゃな』

肩の上で鯛様が手の部分に当たる鰭を動かし、岩山の頂上を指差す。

『頂上の向こう側にある様じゃのう』

「随分、変な所に置いてある」

神様の力の結晶なんてもの、こんなところに落ちてて良いんだろうか。

『なあに、黒い玉は転生者以外から見たらただの水晶じゃしな』

「無害？」

『うむ。ちなみに黒い玉の力を使える事なんて滅多にないんじゃない？』

「選ばれし者……！」

『確かに今のところお主1人じゃし、選ばれし者じゃの』

「えっ」

『お主1人』

「なにそれこわい」

言いながら頂上に到達。

辺りを見渡しつつも、話を続ける為に鯛様を見る。

「どうして、私1人？」

『お主、能力は要らぬと言ったじやろう？』

「言った」

でもその代わりに基盤の強化や成長のリミッター解除をして貰った筈だ。

『戦闘面ならそれだけで良いんじゃないが、他の部分がのう』

「あー……」

『戦っただけではどうしようもない事もあるっ？』

鯛様は片手を上げ、ウィンクを1つ。

『ま。これは儂からのサービスじゃ。勿論使用には儂の許可が必要じゃぞ？』

「ん。勿論」

神様の力なんて自由に使える様になったら、どうなるか解ったものではない。

一時の感情に左右されて世界が破滅、なんて事になりかねん。

「そついえば、他の転生者も居るの？」

『この世界にも既に十数人程おるのう』

「十数人……」

結構多いんだな。

『まあ、邪な考えを持っている者は転生前に脱落しておるし、安心して良いぞ？』

「変な人は、居ない？」

『いや、変人はいっぱいおるのう……』
「……」

うん。そういう人達とはあまり関わらないでおこう。

思考を切り替え、周囲を見渡しながら目を細める。
目に意識を集中させ探索を行う。

結果はすぐに出た。

「見つけた」

『早いもう』

足場になっていた岩から飛び降り、一直線に岩山に根を下ろす1本の樹の下へ向かう。

トンと踵で音を立て樹の目の前で急停止。

うーむ、この身体の使い方にもだいぶ慣れてきた。

まだ1日しか経っていないのに違和感もないし。

……ただなあ……。

プリーツスカートの先をヒラリと捲り上げる。

『ウオオオオオオオオオ！？いきなり何してるんじゃないかありがとう
御座います——！』

鯛様やかましい。

……違和感感じないのもどうなのかなあ。

女になったというのに違和感の欠片も無いのは、元男としてどう

なのだろうか。

まあ今そんな事を考えていても仕方あるまい。

膝を折り、視線を下げればそこにあるのは禍々しいオーラを放つ円球状の物体。

黒い玉だ。

「本当に落ちてる……」

『これは生まれたばかりの玉の様じゃな。運が良いのう、お主』
「うん」

頷きと共に玉を拾い上げ、

「んっ……！？」

こそばゆい感覚に片目を閉じると同時に黒い玉が自身の身と同色の光を放ち始めた。

何事かと思うが、瞬間、光は私の身体へと塗りこまれる様に溶けていった。

『そのまま状態だと運ぶのに不便じゃろ？手の甲を見てみると良いぞ』

「おお……」

見れば、赤い紋様が手の甲に浮かび出る。

中央に一本の両刃剣。

その左右に広げた翼を象ったが如き紋様だ。

なんだこれ格好良い。

『更に集めるとドンドンその紋様もパワーアップしていくぞい』
「ほおお……」

無表情ながらも目を輝かせる。
これは良い。凄く、良い。

「いっぱい、集めよう」

せつかくだし、腕いっぱいになるくらいまで。

『いや、それはどうなんじゃ……？』

だって格好良いだろう！？

○

樹の上に登り、世界を見渡す。

山の頂上という事もあり、見渡せる風景は実に広大だ。
そして、視界の遥か彼方には――、

「大きな、街がある……」

『あれはこの世界の首都メガロメセンブリアじゃな』
「メガロ、メセンブリア……」

よし。決めた。

『ん？どうした？すぐにゲートを開かんのか？』

「秋だというなら、まだ少しだけ、ほんの少しだけ、時間がある」

『まあ、儂の見立てじゃと、ウェールズに雪が降るまで後1ヶ月程度は余裕があるのう』

十分だ。

もし会えなかったら会えなかったですぐに現実世界に向かえば良い。

そうと解れば、計画を考えるのも楽だった。

「メガロなら、もしかして、あの人が居るかも」

『あの人？』

「うん。会えない確率の方が、高そうだけど」

頷きながら片手を樹の幹へ添え、視線に込める力を強めて首都を見つめる。

「クルト、ゲーデル。あの人なら、力になって、くれる」

かも、と付け足すと同時に私は豆粒の様であった街へ向かって駆け出した。

しかし、この辺り獣とか全く見かけないなあ。

第3話 指針決定！そして新たな力！？（後書き）

ほぼ説明回という……！

原作キャラもちょっとだけ出て来ましたが、まだまだ若々しい高畑さんです。

次辺り戦闘が入る予定ですつ。

クルトさんも、出せたらいいなあ。

以下、オリキャラズのイメージ画像です。

> i 3 6 1 1 0 — 4 5 1 4 <

第4話 はじめての闘争！今こそ名乗ろう！我が名は――！

夕焼けが影を照らす。

大地を疾駆する。

豪風が真横を抜ける音が耳に響く。

だが止まらない。

一歩前に出て、身を捻る。

1秒以下の時間差で光が先程まで居た地点を穿った。

無視。

前に出る。

目標の場所まで後僅か。

瞬間、危険を感じる。

……加速！

――受諾。

風の壁を突破するが如き速度で、転がる様に前に飛ぶ。

鱗に覆われた自身よりも巨大な腕部がクレーターを作り出す。
だが飛び込んだ先は目的地だ。

「これで――」

視認出来るのは腕とは違い鱗の薄い部分。

黒い体毛に覆われた胸部。

見据えると同時に全身を光が包む。

「終わり――ッ！」

踏込。

大地を砕ける。
拳を天に突き上げる。
巨体が、宙を舞った。

。

■Side：拳闘士R・S

俺達が修行も兼ねた冒険に出て、数ヶ月が経った頃だった。
まだ人の手が付けられていない遺跡が近場にある。
そんな話とある村の酒場で聞いた。

勿論、俺達はその話に割り込み情報を収集する事を選択。
魅惑的過ぎるお宝の匂い。
そんな匂いを醸し出す遺跡の話聞いて、俺の冒険心は昂つていた。

男ならこんなトレジャーハントチャンスに逃す手は無い。
意気揚々と俺達は遺跡へと向かった。
だが、そんな甘い話がそうそうある訳もない。
今思うともう少し場所以外も詳しく話を聞いておけば良かったと思う。

まあ——実際手は付けられてない様だった。
否、正確には”付けられなかった”のだろう。
何せ入口からして”竜種の溜まり場”と化していたのだから。

……オイオイ、なんでこんなところに竜種が？

等と思うが応えは返って来ない。
代わりに竜種共が丸々とした目でコチラを見て来た。

頭を下げてみる。

竜種共も頭を下げた。

ハハハ、なんだ竜種も礼儀正しいんだな。

笑顔を見せると、竜種も口を開いて、

「シギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「やっぱそうだよなアー！？」

俺——虎獣人のラオ・バイロンは全力で竜種に背中を向ける。

そりゃーもう全力疾走で逃亡開始する為だ。

が、相方である4枚羽の妖精——ラン・ファオは涙目で空中に棒立ち。

恐怖で動け無い様だ。

仕方ないので驚掴みして駆け出す。

だが竜種はそんな事なんてお構い無しとばかりに追走を開始。きつと餌か何かだと思っているのだろう。

見れば、ご飯——なんて考えてそんな幸せな顔で大地を駆けて来る。

……畜生、可愛くねえぞ！？

ランは既に現実逃避中だ。

ラオ、子供は何人が良い？とか聞いてくる。

うわぁコイツはもう駄目だ。当てにならない。

ちなみに俺は3人くらいが良いと思うぞ。

……フッフ、ランに似た緑髪のかりくりとした目が特徴的な……。

って、いかん。俺まで現実逃避するところだった。

そもそも俺とランでは体格差があり過ぎる。

コイツは俺の手にスッポリ入ってしまう程小さな妖精だ。
色々無理があるよな、うん。

現実を直視せねば。

幸い目の前には森がある。

そこに飛び込めば――、

「シギヤア――ッ！」

「やっぱ無理でしたア――！」

森なんて関係ねえ！とばかりに薙ぎ倒して巨体が迫ってくる。

ついでに後ろから光の矢が何本か飛んでくる。

ああくそ！アイツ魔法まで使えんのか！？

……オーソドックスな竜種だな！クソッ弱点がなんかあればよう！

追走してくるのは全身を鱗に覆われた特に特徴の無い”ドラゴン

”と呼ばれる竜種だ。

ただの緑色の鱗が特徴的な”ドラゴン”。

黒い胸毛がキュートな普通の”ドラゴン”である。

だが現状においてはその普通さが厄介であった。

炎に近い属性を持っている”レッドドラゴン”等なら川に沿って逃げたりすれば、

多少相手は嫌がったりして速度が落ちるだろうに。

「ねえラオ。あそこの丘なんて家を建てるのに……」

「ラン、頼むからいい加減帰ってきてくれエ――ッ！？」

ランを胸に抱く様にしながら全力疾走する。

既に平原に出た。

だが相手は構わず追って来る。

……ええいもうすぐ山を出るっていうのにまだ追ってくんのかこのドラゴン！？

どうやら縄張りとかそういう意識が無いようである。流石竜種。

「ハッ！私は何を！？」

「おおラン起きたか！？丁度いい！なんとか攪乱用の魔法を――」

「ゲエ！竜種！ガクッ」

「気絶すんの早ア――ッ！？」

再度気絶した役に立たない相棒に嘆きながらもひた走る。

ていうか完全に気絶して力を抜けたせいか、さっきより重い。

このままじゃ――、

「シギヤアアアアアアアア――！！」

「ああもう駄目だア――ッ！？」

もう殆ど真後ろにドラゴンが迫っていた。

思い切りお口を開けて突っ込んできなさる。

後数秒あのマウスに我々は飛び込まれる事だろう。

ああ神よ。

そう、祈った瞬間だった。

橙色の影が残像を残しながら、ドラゴンの横っ面を蹴り飛ばした。唐突な出来事を理解する間もなく、影の動きは連続した。吹き飛んだドラゴンを追撃する様に影は迫る。

だがドラゴンとてやられてばかりではない。

相手は地上最強と名高い竜種だ。

並の戦士では傷をつける事すら難しい程の戦闘力を持つ。

その事実の通り、とんでもない速さを持ってドラゴンは迎撃を開始。

まずは腕の一振り。

大木の如き巨碗を振ると風が唸り、大地が砕ける。

影は腕を僅差で避ける。

速度が一瞬落ちる。

そこで俺は漸く気づいた。

橙色の影は髪をツインテールにした幼い少女だったのだと小さい。

明らかに1桁台の年齢。

しかも1桁台前半であろう。

そんな少女が背中を見せながら大地を蹴る。

待て——、とは言えなかった。

ドラゴンも少女も動きが早すぎたのだ。

ドラゴンが額から魔法の矢を放つ。

少女が身を捻りそれを躲す。

近づけてたまるかとばかりにドラゴンが両腕を振り下ろす。

少女は加速し、身を転がす様にドラゴンの懐へ飛び込む。

唐突な加速に目を見開くものの、次の瞬間には口が動いていた。いかん、と俺は叫んだ。

竜種の武器はその強大な力だけではない。

その巨体すら武器だ。

想像通り、竜種は脚部による体の支えを放棄した。

結果として現れるのは数トンはあるであろう巨体によるボディプレスだ。

脳裏を潰された少女の姿が過ぎる。

手の中にいるランが髪を振り乱しながら暴れた。

気が付いた瞬間から一連の流れを一緒に見ていたらしい。
ランと2人揃って叫ぶ。

逃げて、逃げろと。

だが、次の瞬間に俺等は目を疑った。

金の暴風が吹き荒れたと思った瞬間――、

「は？」

ドラゴンの巨体が宙を舞っていた。

錐揉み回転するそれは間違いなく竜種だった。

間違いなく地上最強の生命だった。

胸毛がキュートなドラゴンだった。

轟音を立てて、ドラゴンが地面に叩きつけられる。

そして、ドラゴンが吹っ飛んだ地点には大地を踏みしめ拳を天に突き出す少女。

何をしたのかは明白だった。

あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

「突然幼女が戦場に飛び込んできたと思ったら無双していた」

「な、何を言っているのか解らないと思うけど、私達にも解らなかった……」

「年齢詐称とか、実は種族違いとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ」

「そもそもあの小ささだったら、長寿族でもまだ子供だしね……」

「ああ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気分だぜ……！」

右手の中のランと一緒に呆然とした表情を浮かべてる。

そんな中、幼女は目を回すドラゴンへと近づいて行った。

「うええええ！？あ、危ねえぞ嬢ちゃん！？」

「そ、そうよー！？離れてえ——ッ！？」

絶叫するが、幼女は気にせずドラゴンの顔へと手を伸ばす。
その手から出るのは金色の光。
光はあつという間にドラゴンを包んだかと思うと、

「……グル？」

「ん。ちよつと、我慢」

倒れた際に付いたと思われる傷を癒していく。

治療魔法か、何かだろうか。

ランへと視線を送る。

すると彼女は顔を左右に振り、

「ううん。あれ、魔力じゃないよ……」

「じゃあ、あれは——」

「気、だと思っただけ。気ってあんな事まで出来るのかな……？」

ランは少女へ不可解な物を見る視線を送る。

ドラゴンはというとすっかり傷が治ったのか既に立ち上がり、翼を広げていた。

あ、やべえ完全復活しちゃってるぞ、あれ。

「に、逃げ」

「大丈夫」

全力疾走を再開しようとした瞬間、幼女が声を上げる。

平淡過ぎるその声は場に響き渡り、種族を問わず、全員の視線を集める。

ドラゴンですら、首を傾げていた。

戦闘意欲は既になさそうだが、時折コチラをチラチラ見ている。
俺達はご飯じゃありません。こっちは見んな。

「これ、あげる」

「グオッ！」

少女が少し離れた場所に落ちていた袋から魚を何十匹か取り出す。
どうやらドラゴンを餌付けする魂胆らしい。

6 m以上の身長を持つドラゴンにはそれでも足りるかどうかは解らないが。

「グルル」

「うん。よし、よし」

どうやらドラゴン様はご満悦らしい。

少女は無表情なままドラゴンの頭を撫でる。

ドラゴンもドラゴンで満更でもないのか頭を下げた撫でやすい様に配慮していた。

なんだこれ。

「ドラゴンがこんな簡単に懐くなんて……」

ランも啞然。

俺も啞然である。

暫くするとドラゴンは魚を喰って飛び立っていった。

どうやら満足したらしい。

幼女がバイバイと手を振るとドラゴンも宙で咆哮を上げて返した。
ドラゴンが山に帰っていくのを幼女は見つめ続ける。

コチラに見せる背中には、どこか悲しみを背負っていた。

これは幼女とドラゴンの一瞬の友情物語である。

イイハナシダナー。

「……今日の、晩ご飯、無くなった」

ぐー、と腹のなる音が幼女の声と共に聞こえ、思わずすっこけそうになった。

「って、腹減ってんのにやっちゃまったのかよ!？」
「ん？」

コチラのツツコミに幼女が振り向く。
無表情。彼女の顔を表すにはそれが適切だろう。
そういえば戦闘中でも全く微動だしていなかった。
それどころか息も乱してないし、汗もかいてない。
一体、この幼女は何者なんだろうか。
未知との遭遇に近い感覚に、若干危機を感じる。

……だがまあ。

ランを抱き締めていた手を開放し、幼女を見る。
彼女は首を傾げてコチラの様子を伺っている様だった。

「助けてくれて、ありがとな」
「……うん」

幼女は頷きを1つ。
命の恩人はどうやら確り意志疎通出来る様だ。
よし、これなら――、

「あのよ……良ければおれ――」

「じゃあね」

バイバイ、と幼女が手を振る。
おおバイバイな。

……あれ？

ランが隣から半目を向けてくる。
いや確り挨拶はしたし何の問題も――、

「つて、違い！？ちよつと待て！待てつてば！？」
「……？」

幼女が空っぽになった袋を手にコチラを振り向く。

なんか哀愁の漂う格好である。

良く見れば、彼女の服は砂塗れの埃塗れだった。

袋も所々破けてボロボロのものだ。

ツインテールも所々毛が跳ねており、暫く手入れがされていない
様だ。

俺があまりの惨状に声を詰まらせると、

「あのね。あのね。私達、よければ貴方にお礼をしたいのだけど……」
「……」

「……いない、よ？」

ランが代わりに眉尻を下げながら提案するが、幼女はただ首を傾
げる。

心なしかソワソワしている様にも見えた。

もしかして礼を言われるのに慣れていないのだろうか。

奴隷というものが、この世界にはある。

姿を見るに、彼女もそれに近い存在だったのかもしれない。
ならば、男として見過ごす事は出来まい。

「いや、そう言わずにさせてくれ。ここまでされて礼の1つも無し
じゃ、男が廃る」

「……」

「ね？お兄さん——ラオっていうんだけど、この人もこう言ってる
事だし」

「ラン、お前が一番何もしてなかったんだから、お前が一番礼を尽
くせよ」

「ええ！？そこは一家の大黒柱としてラオが代わりをしてくれるん
じゃないのー！？」

「まだその妄想続いてたのかよ！？」

ギャース力騒いでいると、幼女の動く気配。
彼女はコチラへ近づいてくると、

「じゃあ」

無表情のまま、コチラを見つめて来た。

そのまま暫し逡巡する様に、沈黙。

口元に手を当てたり、自分の肩を見たりと拳動不審だ。

いいぞ、幼女よ。

君の過去に何があったかは知らないが、命の恩人だ。

出来る限りの礼はしようじゃないか。

ランを見ると、彼女も頷いた。

どうやら心は同じらしい。

以心伝心な相方が居て、俺は幸せ者だ。

等と思っていると、幼女が意を決した様な雰囲気再度顔を上げ
た。

おお、決まったか！さあ幼女よ！なんでも来るが良い！

「お風呂、貸して下さい」

瞬間、あまりにも些細過ぎる願いに思わず俺達は揃って泣いた。

。

■ Side：転生者 A

この世界の住民マジ優しい。

狭い浴槽の中、身を縮めながら湯船に身を沈め、今日1日の感想を漏らす。

つい数時間前まで山超え、谷超え、メガロメセンブリアを目指していたのだが、

……やー、まさか道中でドラゴンがヒヤッハーしてるとはなあ。

しかも虎っぽい人が襲われているのを発見。

助けたら近場の村で宿までとってくれた上に風呂まで入れてくれた。

研究所から抜け出し、走り続け3日間。

色々恋しくなったものがある。

その1つが風呂だ。

転生前は当然の様に入れた代物。

道中に幾つか川はあったが、

……冷たい水しか流れない川じゃ水浴びなんて無理ですたい。

結構今、寒いのだ。

下手に寒中水泳なんてしては、凍え死んでしまふ。

だがそんな中に現れた、2人。

笑顔で俺達に全部任せると言ってくれた心優しき人々。

その優しさに思わず感涙してしまいそうである。

鉄皮面は相変わらず微動だにしないが。

……うーん、しかし。思い返すとんでもない事したなあ、自分。

思わず飛び込んでしまったが、良く勝てたものだ。

湯に沈んでいた両手を目の前に翳す。

視線の先にあるのは、赤の紋様。

「黒い玉の力、凄い」

『じゃろ？じゃろ？やっぱ神様パワーって凄いじゃろ？』

「回復、攻撃なんでもござれ」

鯛様の指示通りにやっただけだけど、ドラゴンの傷とかすぐ直ったし。

攻撃に関しては気絶させる効果を付与した衝撃波を出せたりと、

……”鯛様に承認して貰えば何でも有り”とか便利過ぎる気も……。

こういう能力は反則ではないのだろうか。

『フッフ、しかも望めば世界創造までやってのける！そこに痺れて憧れるオ！』

「すげえ」

そこまで出来るんかい。

『ああんもつと褒めて良いんじゃないよ!?!』

湯船の中で鯛様がピチャンピチャンと身を跳ねさせる。
ちなみにこの鯛様、お礼をくれた人達にも見えてなかった様だった。

やっぱり転生者以外には見えない仕様らしい。

「ふい」

『おー、見事に蕩けておるのう』

数日ぶりのお風呂なんだから仕方なし。

湯船に顔を半分沈めながら目を閉じる。

長髪が水面に浮いて蛇の様に揺らめいていた。

……髪、長えッスなー……。

マイボディの筈なのに、凄く客観的な感想しか出ない。
傷一つない肌に小さい掌、足、胸、後は――。

「!?!」

『む?』

唐突にボツと顔が赤くなる。

むむ、急に違和感が。

というか、初めて顔に感情が出た。

いや、顔は若干眉尻を下げてただけだが。

しかし、流石に男の身体との違いを直視してしまうとなんという
か、

……恥ずいぞこれ！

見れば鯛様がニヤニヤとしていた。
何その待っていましたとばかりの顔。

『ククク、完全適応してしまったと思っていたが、恥じらいを知る
歳か！？ん！？』

「……」

ブクブクブク。

反論しようとするが、思わず自身の身を抱きしめて黙ってしまう。
小さい、本当に小さい身体だ。

そして柔らかく華奢なシルエツト。
過去の自身とは似ても似つかない。
意識してしまうと途端に恥ずかしくなる。

……クツ、今まで服を脱がなかった反動が今になって来るとは！

鯛様は相変わらず水面から覗かせた顔に笑みを浮かべたままだ。
そつえばこの魚介類様、TS好きでしたね。

『幼女になった事を葛藤する姿……良い！』

「やかまし」

『ぶぎゅ』

ベチャツと掌を鯛様の顔に被せて沈ませる。
そのまま掌の下でニヤニヤしたままエラ呼吸し始めた。
とりあえずさっさと身体を洗ってしまおう。
このままだと変な気分になってしまいそうだ。

身体を洗ってる際、色々触ってしまい変な声を上げてしまった。
良い笑顔を向けて来た鯛様は石鹸で作った泡地獄に沈めておいた。

。

風呂から外へ一歩踏み出すと、狭い脱衣所に出る。
着ていた服は洗濯に出してくれたらしい。

「……ワンピース」
『良いセンスじゃぶぎゅ』

うるさいです、鯛様。頬ぶにぶにしてくれる。
しかし、と黒いワンピースを両手で広げる。

……うーむ。さっきまでの恥ずかしさはそこまで感じないな。

どうやら服に関しては女物でも全然羞恥心は働かないらしい。
よってこの服でも全く問題無しである。

身に服を纏い、準備完了。

暖簾の様にかかっていた布を左右に分け、リビングへ出る。
よくよく考えると、風呂が付いてるとか個室とか結構高いんじ
やなかるうか。

「出た」
「おう。どうだ？さっぱり出来たか？」

リビングの中央に白い体毛に身を包んだ虎獣人——ラオの姿があ

った。

青い甚平に身を包み、テーブルに座る彼の問いに対して返すのは、首肯。

マジですつきりさっぱりしました。ありがとうございます。

あ、ちなみに自己紹介はしておきました。

最初は敬語で話そうとしてたら、堅苦しいのは止めると言われて今の口調である。

「つて、あー！？髪びしょ濡れだよー！？ちゃんと拭かなきゃ駄目だよー！？」

「ん」

声が聞こえると同時に頭にタオルが押し付けられた。

視線だけ動かして、見る。

そこでは小さな4枚羽の妖精——ランが両手でタオルを上下に動かしていた。

まったくもー、と彼女は眉尻を立てた顔で、しかし丁寧に拭いてくれる。

その気持ちよさに目を細めていると、

「じゃ、とりあえず拭き終わったらちよつち事情を聞いて良いかい？」

「！」

ビクリと身を跳ね上げる。

え？事情って何を？ハハハ、私は極一般的な転生者ですよ。ハハハ。

つて、転生者とか言える筈ねえし！？

「話さなきゃ……ダメ？」

「いんや、別に良い。無理にとやかく詮索するつもりはないしな」

ラオはそう言い、ウィンクを1つ。
その仕草が男だけど豪快な笑顔も相俟って、妙に似合っていた。

「……」

「んっしょ、んっしょ」

ホッとする私に対して、ラオは表情を切り替える。
笑みから一変、真剣なものへとだ。

「どんな事情を背負ってるのかは知らねえが、お前さんは俺達の命の恩人だ」

「そこまで、大袈裟に、言わなくても」

「いんや、事実だからな」

そう言いながら彼は立ち上がり、コチラへと歩を進める。

そして、自分の目の前に立つと彼は膝を折り、私と目線を合わせて来た。

「何でも言ってくれ。恩は返す。それが俺の流儀だ」

「私にも言ってね！全力で返しちゃうよー！」

「ラオ、ラン……」

やだ、この2人、本当に優しい……。

思わず目頭が熱くなる。

涙とか出ないけど。もうやだこの鉄皮面ボデイ。

ともあれ、と頭を振る。

好意は嬉しいが、過剰に受け取る訳にもいくまい。

「でも、もう返して、貰った。十分」

「んあ？」

「お風呂」

「んなもん、俺達が宿借りる時のついでだ。返した内に入らねえよ」
「というか私一緒にお風呂入り忘れたー！」

ニヒルに笑うラオと、ズギヤーンと何故かショックを受けるラン。
というか、ラオのなんという男らしさ。

元男としては尊敬しまくりである。

「うう、スキンシップしたかったんだよー……」

「よしよし」

涙目のランの頭を撫でながらほっこり。

『うむ。良い者達じゃなあ』

右肩に乗る鯛様の頷きにも全面的に同意である。

「とりあえず、どうしたもんかな……何か欲しいものとかあるか？」

「ない、よ？」

「……嬢ちゃん、少しくらい我儘言っても大丈夫だぞ？」

え？なんか凄い不憫なものを見る目が向けられてる？

わ、私は元気だし！いきなり研究対象扱いされたけど、不憫じゃないし！

「……ほんと、無い」

「……そうか」

彼は頭を片手でボリボリと掻きながら、どーしたもんかなーと呟

く。

「じゃあさじゃあさ」

「んっ」

目の前に唐突に小さな影。

ランだ。

彼女は心底楽しそうな笑みを浮かべ、

「君、どこかに向かってたんだよね」

まあ、あの格好を見たら旅の人間だってくらいは解るか。
事実だし、隠す事も無い。ここは正直に話してしまおう。

「ん。メガロ、メセンブリアに、行く」

「じゃあ、私達がそこまでエスコートしてあげよう！」

えっへんとランは小さな胸を張りながら高らかに宣言。

「強さ的には嬢ちゃんの方が上だからむしろエスコートされそうだが……」

「げふう！？そ、そういう事言わないのー！ラオ、男でしょー！」

「そらーまー、その通りなんだがなー。あの戦い見せられた後じゃなあ」

「う。まあ、確かに……」

半目でコツチを見ないで下さい。

「……じゃあ、それ、で」

このまま断り続けると、間違いなく問答が続く。

それならば男らしくさつさと決断してしまうに限る。

でも正直なところ、ついて来てくれるなら嬉しい。

鯛様が居たから淋しくなかったが、旅は人数が多ければ多い程良いのだ。

そういうものなのだ。

「って、そういえば嬢ちゃん」

顎に手を当てていたラオがふと気づいた様に言う。

「何？」

「嬢ちゃん、名前は？」

ピシリ、と固まる。

……なんて答えよう、鯛様。

『ふむ。アレなんてどうじゃろう。ほれ、お主の元の名前。アレなら――』

……あー、そういえば自分の名前、アスナと似てるなあ。

転生前の名前そのままなら、名乗っても違和感が無いし。

そうと決まれば後は言うだけ。

並んでコチラの言葉を待つラオとランへと顔を向け、

「アスカ。アスカ、って、呼んで？」

○

『ところでついて来て貰うのは良いが、研究所から追っ手とか来ないかのう？』
「あゝ」

第4話 はじめての闘争！今こそ名乗ろう！我が名は——！（後書き）

次はクルトの出番があると言ったな。あれは嘘だ。

ここまで見てくれた方々には最大限の感謝を！

感想などがありましたら是非ともお願い致します。「（：3」」」

主人公の名前が出てなかったので今更ですが、名乗りです。

次回辺り、メガロに到着します。

ちなみにラオ・ランコンビは原作22巻で出てたあの獣人妖精コンビです。

メガロまで走りっぱなしもアレなので、道中の話を1つ。

彼らの出番は、短いかもしれない……。――（：3「」）――

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？（前書き）

今回、見た目だけ他作品の登場人物が登場します。

申し訳ありませんがそういった展開が苦手な方はご注意下さい。

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？

■Side：転生者アスカ

ラオ・ランコンビとの出会いから3日が経過した。

丁度研究所から脱出して、1週間が過ぎた訳だ。

今のところ追っ手の気配も無い。

最初の1日は異常に警戒してラオ・ランコンビに引っ付きっぱなしだったが、

……なんか終始ラオ達に凄い優しい目で見られただけだったしな！

2日目からは少し離れたりする様にもしたが、変わった様子も無い。

3日目は物陰からチラチラ見るだけにしたが、問題無し。

どうやら研究所からの追撃は無いらしい。

フッフ、やはり全力疾走で山越え、谷越えをしたのが効いたのだろっ。

「おーい、アスカ。そろそろメガロに着くぜ」

「あ……うん」

「凄いよー！大都会だよーッ！」

む。思考の海に浸り過ぎていたらしい。

何時の間にか背後にラオとランが居た。

そちらへ振り向く前に、視線を右に向ける。

硝子張りの窓を覗くと、眼下に巨大な都市が広がっていた。

現在自分が居るのは、金属で出来た空を飛ぶ魚の腹の中。

コチラの世界で”舟”と呼ばれるものらしい。

そういえば、原作でも魔法世界編で活躍してたっけ。

『親近感を感じるぞい』

「形が、一緒……」

この舟の形状、妙に鯛様っぽいのだ。

「しかし乗せて貰えて助かったねー。歩きだと1週間は掛かったやうし」

「だよなあ。おやっさんに感謝しねえとな」

「ん」

おやっさんというのは、この舟の持ち主の事だ。

筋骨隆々の禿頭が眩しい老人で眼光がめっちゃ鋭い。

一般人代表みたいな私は思わず怖くてラオの後ろに隠れてしまったものだ。

情けない？ 幼女ボディならなんの問題も無い！

『だいぶ染まってきたのう』

……葛藤が少なくて残念だったな、鯛様！ 適応能力にはちょっと自信があるんでね！

『感情を思いつきし揺らしながら言われても説得力無いぞい』

……なんの事かなあ！？

というかマイハート覗けるとかプライバシー侵害ですよ、鯛様。そういえばこの鯛様、不思議空間でも覗いてたっけ。

……スケベエ……。

『なんかいきなりスケベ扱いされた！？ 儂、そっちの欲は無いんじやぞー！？』

神様なんじゃぞー偉いんじゃぞーと鯛様が言ってくるがスルー。

「……ん？どうしたアスカ。ボーツとしちまって」

おつと、どうやら鯛様との会話に夢中になり過ぎていた様だ。
ちなみに鯛様とは念じるだけで会話出来るのをつい最近知った。
ラオ達には鯛様が見えていない様だし、彼等の前ではその方法を
用いているのだが、

……傍から見たら、ただボーツとしてるだけなんだよなあ。

『無表情に虚空を見る幼女というのも、良い！』

……そーなのかー。

鯛様の咆哮を無視してラオと視線を合わせる。

彼の肩の上にはラオと同様に心配そうな表情を浮かべるランの姿。

「なんでも、無い」

「そ、そう？ホントーに？」

「気分が悪かったりしたら言っただぞ？」

やだ……やっぱりこの人達優しい……。

「ん……ありがとう」

「いいのいいの！アスカはもっとドーンツと甘えて来ていいんだよ
！」

「おつ。お前はまだまだガキなんだから、遠慮なんてすんじゃねー
ぞ？」

すみません、中身は結構大人です。

正確に言っと――、

……あう？

チリリと頭の中で火花が散る。

む？何歳だっけ？20代前半？後半？うん？いかん、自分の年齢
忘れた。

……うーむ？まあ、その内思い出すか。どっちにしても今幼女だし。
『どうかしたかの？』

……いや、なんでもないツス。ちよつと忘れを。

『むむん？』

身体を捻り、首を傾げる様な動作をする鯛様に、大丈夫ツスと言
つて一息。

頭を小さく振って、改めてラオ達を見るとジーンとコチラを見て
いた。

ランは何故かオロオロとしている。

あ、会話を途中で途切れさせちゃったからか。

「……遠慮、しないよ？大丈夫、だよ？」

「そ、そっ？約束だよ？」

オロオロするランは可愛いなあ。

この鉄壁フェイスが無ければ思わずニヤニヤしていた事は間違
ない。

「おい！小僧どもそろそろメガロメセンブリアに着くぞ！降りる準
備しとけ！」

む、この厳つい声はおやっさん。

こんな怖い口調だけど、良い人なんですよ？

「準備、しよ？」

首を傾げながらラオ達の荷物を指差す。

表情に感情が出づらい為、仕草で補う事にしたのだ。

その動作にランは少し戸惑った様だが、すぐに笑顔になると、

「そだね！」

「うつし、じゃあとつとと荷物纏めちまうか。ランとアス力はゆっくりしてろ」

「手伝う」

「私も手伝うよー！？」

「ちみつこどもに任せる程の作業量はないってーの」

カラカラと笑いながらラオは荷物の方へ向かって行く。

なんかその頼もしい背中が――、

「お父さん、みたい……」

「え？」

「ラオ、お父さん、みたい……良いな」

「アス力……」

生き返ったら、ああいう漢らしい背中を見せる事の出来る大人になりたいものだ。

……ん？

ラオの背中から視線を外してランを見ると、何故か彼女は涙目に

なっていた。

いや、本当に何故。

疑問が頭を過ぎると同時、ランの姿が掻き消えた。
続いて、胸に衝撃。

「!？」

「アスカア——ッ！」

見れば胸元に張り付く、目尻に大粒の涙を溜めたランの姿。
唐突な展開に目を白黒させてしまうが、彼女は気にせず真っ直ぐ
視線を向け、

「私の事、お母さんって呼んでも良いんだよ!？」

「いや、それ、無理」

「ちよつ、なんでえ——ッ!？」

だって、ちっちゃいし。

。

■Side：ラオ・バイロン

アスカという少女は、どういう人生を送って来たのだろうか。

俺は最近、あの少女を見る度にそんな事ばかりを思う。

それなりに腕に自信がある俺等よりも確実に上の実力を持つ少女。
それでいて——、

……淋しがり、なのかね。ありゃあ。

出会ってから3日間、彼女を見てきた感想がそれだ。
特にその性質が顕著に出ていたのが出会った翌日だった。
とにかく自分達から離れようとしな

しかも俺とランが一緒に居ないと表情には現れないものの、凄まじく狼狽する。

見知らぬ者が近づけば視線を鋭くして威嚇するし、

……親猫を取られまいとする子猫みたいな感じか？

2日目からは俺達は結構強いんだぞという風に教えたら、少し離れる様になった。

だが相変わらず付かず離れずといった距離。

あんまり長時間離れてると心配するという点では変化無し。

表情には出ないが、そわそわしだすのだ。

定期的にコチラを見ては、大丈夫？と問いかけてくる。

3日目は時折姿が見えなくなった。

まあ、振り返ると大体壁からチョコンとツインテールが出てるのが見えたが。

小動物っぽくて微笑ましいものを感じてしまったのは記憶に新しい。

……本当に、あの子はナニモンなんだろうな……。

正体については聞かないでくれと暗に言われた。

つまり、彼女は現在、自分の身の上を聞かれては拙い状況にあるという事だ。

それを踏まえた上で予想してみる。

俺の予想はこうだ。

とある事情により天涯孤独の身となったアス力。

彼女はその戦闘力に目をつけられ、とある商人に奴隷拳闘士として買われた。

きつとあの無表情っぷりもその頃に……。

勿論俺達でも勝てる気がしない彼女に勝てる奴なんてそうは居ないだろう。

そこまで酷い目にはあっていない——と願いたい。

だが、彼女は対戦相手を気遣ってしまい、中々本気を出せない。例え傷つけても、あの治癒能力で癒してしまう。

そんな事じゃ試合が盛り上がる訳もなく、雇い主は苛立っていった。

そしてついには、彼女を名のある富豪に売り渡してしまおうと考える。

あの整った容姿だ。

将来は間違いなくべっぴんさんになるだろう。

それなりに良い服を着せられ、連れてかれる彼女は道中と思う。

普段と扱いが違う。

何かがおかしい、と。

幼いながらに危機を察知した彼女は持ち前の身体能力で脱走。

見栄えを良くする為、”首輪”が付いていなかったのが幸いしたのだろう。

運良く脱走は成功した。

さて、脱走に成功したとして、彼女は何処へ行こうというのか。

彼女にメガロに付いたらどうするのか？と尋ねた際、こう言っていた。

人に会いに行く、のだと。

つまり、彼女にはメガロメセンブリアに知り合いが居る。

そこまで辿り着ければきつとどうにかなる当てがあるのだろう。

例えば、遠い親戚等。

だが、だがしかしだ。

相手は彼女が奴隷になるのを黙って見ていた親族だ。

果たして、彼女がそこまで辿り着いたところでまともに取り合ってくれるのか？

答えは限りなく”否”に近いだろう。

だが彼女はこの数日の様子を見るに、愛情に飢えている。

例え僅かな可能性でも縋りつきたいに違いない。

ならば、ならばこそだ。

もし彼女が頼ろうという人間が非情だった場合、俺達が守ってやらねばならない。

そう、俺達には彼女には恩義があるのだ！

背後から聞こえた”お父さん”というアスカの呟きに胸が熱くなる。

任せろアスカ。

お前はこの俺達が必ず守ってやるからな！

「……なんか、ラオ、燃えてる」

「あー、なんか妄想してるねあれー。たまにあるの。気にしないでいいよー？」

。

■ Side：転生者アスカ

というわけでやってきましたメガロメセンブリア。

ここは港から少し歩いたところにあるカフェのオープンテラスだ。頭の上に広がる黄色いパラソルがオシャレである。

その下の白く円いテーブル上には3つのカップが置かれており、それぞれの前にラオ、ラン、私の順で座っている。

「で、アスカ。その知り合いっていうのは何処にいるんだ？」

「いきなりだねー、ラオ。どしたの急に。やる気満々？」

「あたぼうよ」

「……うん。ありがとう。でも……」

続ける言葉を悩み、言い淀んでしまう。

ラオ達は首を傾げるが、目を閉じる動作で暫し黙考の時間を要求する。

脳を冷却する為、カップを手に取り、中身を啜る。

むう、見事なまでのオレンジジュース。

褒めて遣わす。女将を呼び！

『それ、普通に市販のパックから流し込んでおったぞい』

……アーアー！おいしーなー！このオレンジジュースーッ！

それはともかく。

知り合いというのは、クルト・ゲーデルの事だ。

彼の居場所については勿論、

……解らないでゴザル。

『情報収集もまだじゃしな』

そもそもメガロメセンブリアに常駐してるのかが疑問だ。
実際、会えたら僥倖。

会えなくてもすぐに現実世界に向かうつもりで居たのだ。
だから簡単に情報収集するつもりでいたのだが、

……追っ手を警戒しててそれどころじゃなかったしなあ。

『ま、今からでも十分間に合うじやろっ』

……そうだね。でも、もうオスティアとかに行ってたら流石に会えないよなあ。

『そうじゃなあ。せつかくじゃし、道端でも歩いてくれていると助かるんじゃないの？』

……ハハハ、まさかそんな都合良い事あるわけないでしょー。

『そうじゃよなあ。人生、そんな上手く行く筈ないじゃろうしなー』
……ハハハ、だよー。

とりあえずやらねばいけないのは情報収集だ。

ラオ達とはここで一旦別れるとしよう。

これ以上迷惑をかける訳にもいかないし。

よし。方針は決まった。

後はこれをラオ達に伝えるだけだ。

意気込みを胸に、目を開く。

「いやあ。ここの紅茶は中々いけますね」

「あらあら良かった……オススメした甲斐がありましたわ」

そのまま全力で眼が見開かれた。

瞬間、跳ねる様にして椅子の上に立ち、凝視する。

大きく開いた瞳に映るのは、ラオ達の背後。

視線の先に、彼らは居た。

「ど、どうしたアス力？」

「何？急に椅子の上に乗ったりして、何か見つけたの？」

見つけた。

ええ、そりゃあもう見つけましたとも。

え？何この天文学的確率での遭遇。

ご都合主義なの？幸運スキル持ちなの？

『えー』

鯛様もそんな『何それご都合主義過ぎね？儂、超幸運持ちの設定とかしてないんだけど？』的な顔でコツチ見ない。

目を両手で擦るが、視線の先の人物達は消えない。
幻じゃない。

目を閉じてもう1回開いても、ほうらそこには――、

「フィオネ君のオススメですからね。不味い訳がないですよ」

「ふふっ、クルト様だったら……お世辞が上手ですわ」

「いやいやお世辞などではなくてですね――」

オープンテラスの隅の席に腰かけて優雅にティータイムを楽しむ
スーツ姿の男。

原作よりもずっと若々しいがあの髪型に、眼鏡。

あと腰に携えた刀。

間違いない。

クルト・ゲーデルだ。

その向かい側には某ISでちょろいさんとか呼ばれてる方が、

「えっ」

『えっ』

「ん？」

「ほへ？」

「あら？」

「む？――むう！？」

上から、私、鯛様、ラオ、ラン、ちよろい——もといフィオネさん、クルトである。

というかクルトさん超目を見開いてコツチ見ないで下さい。見た目が見た目だから仕方ない気もしますが。

それよりもフィオネさんですよ。

否。セシリアさんですよ。

いや、待て私。

もしかしたら似てるだけなのかもしれない。

世界が違うし、他人の空似という事もあり得る。

腰まで伸びた金の髪。

髪の両サイドにアクセントの様に輝く縦ロールが実に麗しい。

白を基調としたロングスカートのスーツ姿も実に麗しい。

整った顔立ちに柔らかい目つき、ちょっと長いまつ毛も実に麗しい。

肩に乗っている雫みたいな精霊も実に——、

『あ。あれ儂の知り合いの神じゃ』

……転生者かよ！セシリアさんモデルかよ！

ガターン！と派手に音を立てて地面に両手両膝を突き立てる。

その姿はまさに人生に挫折した者の如く。

「お、おいアスカ！？」

「どうしたのアスカ！？」

「……なんでも、ない」

まさか他作品の登場人物の姿をした転生者が居るとは……。

とにかくラオ達を心配させる訳にもいかない。

「大丈夫、だよ……」

身体をよるめかせつつ、立ち上がる。

なあにまだ世界観が1つ破壊されただけだ。

ふふふ、と笑う私にラオが心配そうな表情を見せる。

大丈夫だよ、ラオ。私はまだ頑張れるから……。

「ハッ！まさかコイツがお前の探していた……！？ってどっかで見た事あるような？」

「あー！この人この前選挙に出てた人だー！」

ランは叫びつつ、クルトを人差し指で示す。

へえー、選挙とかやってるんだ、MM元老院って。

「……あら、そういう事ですよ？」

そういう事ってどういう事ですかお姉様。

『よっ！』

『よっちゃー！』

鯛様達も仲良さ気に挨拶してないで早く事情説明をして下さい。
もうやめて！私の頭の中は急展開の連続でボドボドよ！

「ちょっと良いですか」

「！……なん、ですか？」

はっと顔を上げれば何時の間にか真正面に白い棒が2本。

否。それは棒ではなく、何時の間にか接近して来ていたクルトの足だ。

見上げれば、彼は真剣を体現したかの様な表情を一気に崩し、

「よければこれからお茶会でも一緒にどうでしょう——」お姫様
”?”

とても良い笑顔でお誘いをいただいた。

願ってもない。

コチラとしても彼と話したいと思っていたのだ。

この提案は渡りに船。

まさに順風満帆な流れだと言えよう。

だが、しかし。

貴方の笑顔はとても素敵なのですが——。

提案自体はとても魅力的なのですが——。

ええ。実に素敵で魅力的なのですが——。

……その皆に見えない様にチラチラ見せてる”捕縛”って描かれた
符はなんでしょう？

無表情のまま、冷や汗をダラダラと流す私。

対してニコニコと笑みを崩さないクルトさん。

周りの人々は、呆然と見ているしかなかった。

『我等揃って水魚の交わりコンビ!』

『イエーイ!』

やかましい貴様ら、煮るぞ。

『ひい!』

第5話 嗚呼麗しのメガロメセンブリア！急転直下の超展開！？（後書き）

情報収集パートは犠牲になったのだ……。
投稿速度の犠牲にな……。

ここまで見てくださり、ありがとうございました！
ご感想などがありましたら、どうぞよろしくお願い致します。

うーむ。やっぱり急展開過ぎですかね？

あまり長々とやるとグダってしまうので、
申し訳ありませんが、かなーりご都合主義で進めておりますっ。（；

´・ω・`）

今回はクルトさんとのOHANASHIタイムです。

■以下、早いですが今回現れました新たな転生者フィオネさんの設定画です。

> i 3 6 6 6 2 — 4 5 1 4 <

彼女についてはまた次話にて詳しく……！

第6話 話をしよう！眼鏡と私と事情説明！

■Side：転生者アスカ

「1、2時間で程、貸し切りにさせていただきたいのですが」

「ふむ。1、2時間ね……別に良いが、なんでまたお偉いさんがいきなり……」

「そこはまあ、色々あるという事で」

「詳しくは聞くなつて事かい？」

「フッフ、別に私は何も言っていないませんが？」

なにこれ怖い。

視線の先ではカウンター越しに髭が渋い店主とクルトが笑い合っていた。

ただ笑みを向け合っているだけだというのに、何このプレッシャー。

……これが出来る大人のプレッシャーというものか……！

『物凄く駄目人間臭い発言じゃぞ、それ……！』

……泣くよ！？

内心涙目で叫んだら、頭を撫でてくれた。

鯛様はやっぱり優しかった。

『幼児化が進んどるんじゃないかのう、これ……』

……ん？鯛様、何か言った？

『なんでもないぞい』

ふう、と一息。

どうやら店主とクルトは続けて貸し切りの代金について話し始めた様だった。

交渉はもう少し続きそうだ。

ラオとランは店の隅で何やら話し合っていて、輪に入れそうもない。

なほ少し時間もあるし、彼女と話すでしょう。

「フィオネさん」

ずっと隣に立っていたフィオネへと身体ごと向き直る。

彼女は私に名前を呼ばれると柔らかな微笑を浮かべたままコチラを見た。

良く手入れのされていると思われる金の長髪が振り向きの動作に釣られて靡く。

凄まじい美人さんだ。

街で見かけたりしたら、普通の男ならば思わず振り返ってしまうに違いない。

「はいはい。なんですよ、リトルプリンセス？」

「リトル、プリンセス……」

「気に入りませんでしたか？」

「……別に、良い」

見た目はそのままだしなあ。

「では、質問をどうぞ？」

『どうぞつちや！』

首を傾げる彼女の肩に雫の様な形をした神様の姿。

「……その、子は？」

「ああ、この子は……」

「水神だっちゃ！」

「喋り方が鬼つ子エ……」

「水ちゃん」

「なんか凄まじく可愛らしくされたっちゃ！？」

ズガビーンと効果音を背負いながら水神は墜落した。

地面に落ちて弾けた。

神様だし大丈夫だろうと全員スルー。

世は無常で無情である。

「儂は？」

「鯛様」

「鯛の神様ですの？」

「違うよ！？」

ズギヤーンと効果音を背負いながら鯛様は墜落した。

地面に広がった水神の上に落ちた。

まるで陸に打ち上げられた魚である。

「まあ、この子達は置いておくとして」

「『さりげなく放置された！？』」

「旧交を温める為にも、少し戯れてなさいな」

「『ういまむ』」

案外簡単に言う事聞くだね。

フィオネさんなんか怖いし、仕方ないね。

でも神様としてそれで良いのだろうか……。

「何か？」

「なんでもないです、まむ」
「よろしい」

フィオネは胸に手を当てながら楽しげに微笑む。
人を安心させる様な、暖かな笑顔だ。

もしかして今までの会話はコチラの緊張を解す為のものだったりするのだろうか。

……多分、この人良い人だ！

自分は直感を信じるタイプである。
故に彼女を真っ直ぐ見つめ、問う。

「助けて、欲しい」

簡潔に自分の望みを告げる。

自分勝手だと思う。

だが、クルトの傍に居る転生者である彼女を仲間に取り込めれば、
それだけで作戦の成功率は一気に上昇するのだ。

「助けて、ですか？」

彼女は唐突な私の願いに首を傾げる。

しかし、その戸惑いは一瞬。

次の瞬間には笑みを戻し、私の頭に手を置いた。
温かい手だ。

自然と目が細まり、体の力が抜ける。

「仲間の頼みですしね。わたくしに出来る事なら力になりますわよ

「？」
「ふい」

撫でられると思わず情けない声を上げてしまった。

その声に彼女は楽しげに笑い声を漏らしながら、撫でると言う行為を続行。

「……」
「よしよし」

いかん。本当に気持ち良すぎる。

普段は微動だにしない鉄皮面すら蕩けてしまう様な恍惚感が沸いて来る。

このままでは液体人間になってしまう。

『なんか知らない内に姉と妹の微笑ましい光景みたいのが繰り広げられとるぞい』

『鯛ちゃん、静かに！今良いトコロっちゃよ！』

何がだ。

「それで、頼みというのは……あら？」

頭の上の手が彼女の疑問符と共に止まる。

……？

なんで撫でてくれないのか。

目を開け、彼女を見上げる。

頬を赤らめながら、横を向いていた。

釣られる様にそちらを見る。

「フィオネ君、お姫様。お茶会の準備が整いましたよ」

変態眼鏡が居た。

「まあ、流石クルト様。手早いですわ」

「フィオネ君にはお姫様のお世話を任せてしまいましたからね。私もやるべき事はしっかりと迅速にやらねばならないでしょう？」

「いえいえ、この子とても可愛らしくて……むしろ私が癒されてしまいましたし」

むう。

「……」

「……何故睨むのですか、お姫様」

なんでもないし！邪魔されたからって怒ってないし！
そもそも撫でられたくらいじゃ気持ち良くないし！

『滅茶苦茶喜んでたがのう……』

『自分に正直に生きるのが一番っちゃよ！』

煮ますよ。

『ひいっ……』

○

現在カフェの中央には、5つの影がある。

白い円形のテーブルを囲う様にしてあるのが4つ。最後の1つはテーブルの上にあった。

テーブルの周囲を囲うのは、私、クルト、ラオ、フィオネだ。

そして、ランがラオの目の前に座っている形だ。

彼女は心配げな表情でコチラを見ながら、

「大丈夫、アスカ？この人達に変な事されなかった？」

「大丈夫、だよ」

頷き、ランの頭を撫でる。

彼女は目を細めて気持ちよさそうにしてくれた。

その様子にクルトは大仰に肩を竦め、

「信用がありませんね？」

「まだ会って1時間も経ってない奴を全面的に信頼するのは無理があると思うが」

「そこは私の顔に免じて信用してくれませんか？」

「……すまん、胡散臭い」

「ド直球ですね、貴方」

本当に申し訳なさそうにそっぽを向くラオ。

数日見てきたが、やはり嘘はつけない性格の様だ。

「それで店を貸し切ったは良いけど何を話すつもりなんだ？」

「あ、そうそう。私達もさっき話し合ったけど結局解らなかったし」

小さなカップを手にお茶を飲むランが眉尻を下げつつ漏らす。

「そういう事、思い切りバラして良いんですの……？」

「あっ」

「ランエ……」

どうやらこのコンビはとことん嘘がつけない性格らしい。

「いえ、何、簡単な事ですよ。少し真面目な話がしたかったもので」

真面目な話する為に貸し切りとは、流石MM元老院議員は格が違った。

「さて。私の目的はただ1つ。お姫様……いえ、アス力君でしたね」
「ん、私？」

はて。何故彼が私を求めるのだろうか。

原作では特にロリコンの気を感じさせる描写は無かった筈だが。

「おい、アス力に何をするつもりだ？」

「そんなに怖い顔をしないで下さい。別に何もする気はないですよ」

ただ、と彼は前置きをした上で人差し指を立て、

「彼女、身寄りはあるのですか？」

「……お前、やっぱりアス力の事知ってるのか？」

「まあ、私も話で聞いただけです」

微笑みながら放たれたクルトの言葉にラオの眼光が鋭くなる。

え？何故いきなりこの様な剣呑な雰囲気になるのですか。

というか話って何ですか。

会った事は無い筈だし、もしかや明日菜と勘違いしたりしているの

だろうか？

彼女の事ならタカミチとかを経由して話が伝わっていたりしそうだし。

「じゃあ、アスカの探してた知り合いってこの人なの？」

「……知り合いでは、ない。でも、探してたのは、この人」

「えっと、どゆこと？」

「お願いしたい事が、あった」

「お願いしたい事？」

「ん」

ランの疑問に対して首肯。

「後で、話す。まずは、クルトさんの、話を聞こ？」

「おや………すいませんね。気を使わせてしまった様で構わない」

一息ついて、目の前に置かれたミルクティーを飲む。
あ。結構熱い……。

「どうぞ」

「では、単刀直入に……」

彼は両肘をテーブルに着き、顔の前で両手を組みながら微笑む。
瞬間、唐突に嫌な予感が脳裏を過ぎる。

いかん、これは間違いなく回答に困る質問が来るという予感だ。
そして、その予想は正しく間違ってはいなかった。

「アスカ君。貴女、私の義娘になりませんか？」

相変わらずの笑顔。

彼は、さらりと爆弾発言を言つてのけた。

。

■ Side：ラオ・バイロン

アス力を義娘にしたいと目の前の男は言つた。

初めて会つた時から浮かべている笑顔が妙に胡散臭い男だ。
だが強い。

それだけは身のこなしと気配から察する事が出来た。

恐らく俺とランが束になつても勝てない程、実力差があるだろう。
だが、退く訳にはいかない。

こちらアス力を守ると数時間前に決意したばかりなのだから。

「待て。 どうして唐突にそういう事になる」

腕を組みながら、問う。

すると彼はコチラの疑問を歓迎する様に微笑した。

「何。 彼女が私の知り合いに似ていたものでして」

「そもそも何故アイツに身寄りが無いのを知っていた？」

「フフフ。 知り合いから聞いたのですよ」

「胡散臭え……」

俺の第六感が訴えている。

この男は信用出来ない、と。

しかもこの男、さっきからどうもアス力自身を見ていない気がす

る。

まるでアスカを通して、誰か別の奴を見ている様な感覚だ。恐らくそれが彼の言う知り合いなのだろう。

それも加えて、気に食わん。

「で、その知り合いっていうのはどこに居るんだ？」

「さて、現在は現実世界でしたか……少なくとも魔法世界には居ないでしょうね」

一瞬だが、クルトの表情が曇る。

「まあ、色々ありましてね」

初めて素の表情を曝け出す様に、彼は苦笑する。

だがその表情の変化は一瞬だった。

彼は表情を真剣なものへ変え、俺を一度見てからアスカに視線をやる。

「さて、貴方との問答はともかく。アスカ君はどうですか？」

「魅力的な、提案」

「アスカ!？」

俺とランの声が被る。

まさかこの得体の知れない男についていくつもりか。せめてもう少し情報を集めてからでも遅くない筈だ。

故に俺とランはアスカの早計な行動を止めようと――、

「だが断る」

して、そのまますっ転んでテーブルに頭を打ち付けた。

。

■転生者アスカ

うわぁ痛そう。

見事にすっ転んだラオとラン。

顔を打ち付けていた様だが大丈夫だろうか。

「こ、断るとは？魅力的と言ってくれたと思ったのですが？」

「魅力的。だけど、私、やる事がある」

クルトの戸惑いを含んだ声にまっすぐ見つめながら言葉を返す。

「やる事とは何ですか？」

ラオの向かい側に座るフィオネが問いかけて来る。

表情を真剣そのもの。

他の面々とは違って戸惑い等もない様子だった。

「まず、これから話す事、信じて貰いたい」

正直に話して、信じて貰えるかは解らないが、それしか出来はしない。

言葉の真偽を証明出来るもの等ないのだから。

態度と後は、

……この容姿に免じて、信じてくれる事を信じて！

『儂の巧みな采配が功を奏した様じゃな！』

そうですね。

だが口りにした事は許されざるよ。

『あ、案外お主もねちっこいのう……！？』

まあ、冗談はさておき。

コチラへと視線を送る皆を見返す。

皆一様に疑いの色等、微塵も存在しない表情を向けていた。

「俺はアスカの言う事なら信じるぜ」

「私もだよー！」

「わたくしも信じますわ」

「では、私もです。先程から術式に何の反応もありませんしね」

ちょっと待って下さい。

その眼鏡、一体何時の間に何を仕掛けてたんですか。

いや、今はその術式とやらに感謝すべきか。

多少なりとも信頼を得る事が出来た様だし。

ならば、とフィオネと目を合わせて口を開く。

「フィオネさん、ウェールズ、知ってる？」

まずは確認。

彼女が”原作を知っているなら”、ここで何らかの反応を返してくれる筈だ。

「ええ、知っています。イギリスを構成する国の1つだと認識しておりますわ」

「そこで、これから、何が起こるかは？」

「……恥ずかしながら、わたくしに”その知識”はありませんわ」

返答にコチラが固まると、彼女は眉尻を下げた表情を見せる。
まさかとは思ったが、本当に彼女は原作の知識を持っていない様
だ。

「ウェールズ、ですか。嫌な予感がしますが、何が起きるんですか
？」

「その前に、人払い」

座ったまま腰と視線を動かし真後ろを見る。
開け放たれた扉の向こう側には結構な人数の人だかりが出来てい
た。

どうやら有名人がカフェを貸し切ったという事実が野次馬を呼ん
だらしい。

「では」

クルトが懷に手を入れ、1枚の符を取り出す。
瞬間、符が光の粒となり、空間に溶け込んだ。

「これで周囲へ音が漏れることはありません。安心して下さい」
「ん」

一瞬で防音結界を張ったのか。
とんでもなく手際の良い男である。

「ありがとう」

「いいいえ。それでは話の続きをどうぞ」

「じゃあ、続ける」

一息。

「計画実行は、冬。冬の、何時起こるのかは、解らない。雪が降っていた、筈」

「計画……？」

いつの間にか復活したラオが訝しげな表情を向ける。
椅子に座ったまま姿勢を直し、続けて皆へ視線を送った。
彼らが自分を見ている事に頷きを1つ。

「ウェールズの、山奥。そこにある村が、狙われてる」
「ウェールズ……山奥？」

クルトから上がる疑問の声。
表情を見る限り、周囲の皆もクルトと同様の感情を抱いている様だ。

一瞬の沈黙。
しかし、その間は長く続かなかった。
顎に手を当て、考え込んでいたクルトが顔を上げたのだ。
それも、目を見開いた驚愕の表情を浮かべてだ。

「まさか——っ!？」
「ん」

彼の叫びにも似た疑問を首肯する。
MM元老院議員の彼ならば知っていてもおかしくはあるまい。
あの山奥にはどのような存在が居るのか。

「そう」

目を細め、言葉が続ける。

「狙いは、ネギ・スプリングフィールド」

「スプリングフィールド、だと」

「まさか英雄の？」

ラオとランが若干の焦りを帯びながら、驚の感情を露にする。それに対してフィオネとクルトは冷静さを取り戻していた。フィオネはクルトを一瞥してから、コチラを見て、

「そして、アリス・スプリングフィールドも、ですわね？」

え。誰ですかその人。

第6話 話をしよう！眼鏡と私と事情説明！（後書き）

フィオネについては次回と言ったな。
あれは嘘だ。

じ、次回こそ！次回こそしますので！

まずはここまで見てくださった方々に最大限の感謝を。
感想などがありましたら是非お願い致します！

今回はなぜか妙に難産でありました……。
若干失速していますが、次回からは話の流れもだいぶ速くなる予定です。

ここでまたもや新キャラクターの名前。

基本的にこの話に登場するオリジナルキャラクターは転生者です。
各々、原作知識の有り無し、という差異はありますが……！

第7話 クルト・ゲーデルの思案〜MM元老院の陰謀添え〜

■Side：クルト・ゲーデル

時刻は夜。

窓から見えるのは黒く染められたキャンパスだ。

やや視線を落とせば、そこに連なり聳え立つの灰色の塔の群。窓際に立てば、眼下に都市の景色が広がっていた。

現在地はメガロメセンブリアの中央近くにある高層ビルの一角だ。その上層に自分達が居た。

振り向けば、奥行のある部屋がある。

中央には部屋と同様に奥行のあるテーブルが置かれており、

「むぐ」

「うまうま!」

「うひょお、こりやうめえ!」

「おかわりはいっぱいありますからね」

白のテーブルクロス上には様々な料理が並べられている。

それらを勢いよく手に取り、口へ運ぶのは3人の男女だ。

勢いよく食事をかき込むのは大小2つの人影。

ラオ、ランのコンビだ。

そして、背丈が小さく静かに食事を進めるのは、

……アスカ君、ですか。

観察する為に目を細めながら、顎に手を当てる。

アスカという少女は、実に子どもらしくない子どもだった。

発言内容自体は突拍子もない。

が、淡々とそれを述べる様子を見る限りでは、

……嘘を言っている様にも見えず、術式に反応も無し、ですか。

それに一緒に居るラオ、ランからの信頼されようも異常だ。

どう考えても齡1桁にしか見えぬ子どもに対する態度ではない。

……だが。

彼女にはそれを成してしまう独特な雰囲気がある。

それは、カリスマと呼ぶべきか。

私までも術式の内容の有無に関わらず、彼女の言葉に耳を傾けて
しまう。

それは、

……まるで王の演説の様でしたね……。

言葉を聞く者を否応なしに納得させてしまう風格。

彼女の平淡な、しかし堂々とした言動にその片鱗を感じる事が出
来る。

……流石はあの”アスナ姫”の写し身と言ったところですか。

王族の血は確かに目の前の少女に投影されていた様だ。

……ただの”クローン”とは思えませんね。

そう。

彼女は”クローン”なのだ。

実は私は眠った状態の彼女とは何度か出会った事がある。

更に彼女が眠りについていた研究所の職員の何人かは知り合いでもある。

故に知っている。

本来なら、”彼女は目覚める事なく一生を終える筈だった”という事を。

だが、その予測は軽々と覆された。

数日前に彼女が目覚めたという情報が届いたのだ。

それを聞いた時、少々狼狽してしまったのは記憶に新しい。

だが、驚くのも仕方ない事だろう。

目覚める筈がないと断言されていた者が目覚めたのだ。

それは死人が生き返ったと聞かされたに等しい。

しかも目覚めたその日に脱走したという。

それを聞いた時、かなり狼狽してしまったのは記憶に新しい。

……更にいきなり目の前に、ですか。

トドメとばかりに、いきなり現れた時は本当に心臓が止まるかと思った。

驚愕の連続による心労を癒す為、フィオネが奨めるカフェへ来たというのに、

……まさか心労の原因と遭遇するとは。

ここまで来ると運命的な何かすら感じる。

そこでふと思い出したのが、彼女には身寄りがないという事だ。もしかしたらこの出会いが運命だったのかもしれない。

というわけで、養子にならないか？と誘ったが一蹴された。運命とは実に儚いものである。

……べ、別にタカミチが羨ましいとか思ってますからね！

まあ、何はともあれ、彼女とこうして出会えたのは行幸だ。情報によれば彼女はアスナ姫の記憶を持っているという。

もし本当ならば、アスナ姫の全てを受け継いでいる可能性もある。”世界を破滅へと導きかねない”能力——魔法無効化能力も、だ。その為、MM元老院には内密で必死に探し回っていたというのに、

……自らメガロセンブリアへやってくるとは行動力に溢れていますねえ。

しみじみと遠い目をしながら思う。

彼女曰く、私に伝えたい事があったから来たらしい。

何事かと聞いた直後は内心首を傾げたものだが、その理由を聞いて納得した。

『スプリングフィールド家の子ども達が狙われている』

それを聞いた時、私は思わず顔を顰めた。

誰がとは聞くまでもなかった。

候補に挙がるのはMM元老院の一部勢力、それと『完全なる世界の残党だ。』

心当たりは多々あった。

完全なる世界の残党については理由を述べる必要すらない。

自分達の組織を滅ぼしたパーティの中心人物の息子達だ。

恨まない筈がない。

だが、彼らは今その殆どが私とタカミチの手により狩られ、沈黙している筈。

そして、MM元老院の一部勢力だが……。

こちらは前々からMM元老院内でも、影で話に上がっていた事だ。曰く、災厄の女王の子孫を生かしておく訳にはいかない。

曰く、息子はまだ良い。英雄の息子として立派な魔法使いになれるだろう。

曰く、ただし娘、テメーは駄目だ。

最後の言葉を放った輩はその場で粛清しておいた。

勿論、笑顔でだ。

アリカ様そっくりの彼女に手を出すとか本気と書いてマジで許されざる行為である。

アリカ様の娘——アリス・スプリングフィールドとは誠に遺憾ながら面識はない。

しかし、会わずともこの胸は彼女ともう1人のアリカ様の息子への想いに溢れていた。

十年程前の記憶を思い返す。

脳裏に浮かぶのは、処刑直前のアリカ様の痛々しい姿。

私はアリカ様を救えなかった。

その後悔は今でも心の隅に張り付く様にして残っている。

故にその子ども達に驚異が迫っているならば、力にならねばなるまい。

今度こそ、後悔をしない為にも。

ちなみにアリスを知っているのは、彼女の写真を持っているからだ。

毎日眺め、心を癒すのに使用している。

何故かフィオネに毎度殺気の籠った目で見られるが。

会いに行こうとするとフィオネに全力で妨害されるし。

コチラとしてはそろそろ限界でもあったのだ。

故にその内無理矢理にでも暇を確保し、赴いて拝顔する予定でいたというのに、

……アリカ様の麗しさを解らぬ輩共め……！

嗚呼、しかしアリカ様は何処へ行ってしまったのだだろうか。

まさかナギと共に子ども達を置いて行方不明になるとは。

いや、『完全なる世界』との戦いの中、行方不明になったとは聞いている。

だが彼女達がそう簡単に死ぬとは信じられない。

ハッ、もしや育児放棄してナギと怠惰で淫靡な毎日をどこかで！？

おのれナギ、我々のアリカ様をたぶらかすとは許されざる行い。

フッフ、こうなれば子ども達と出会った暁にはある事ない事を吹き込んでくれる。

……おつと思考の方向がズレましたね。

思考の中で話が逸れるというのもどうだろうと思うが、それは置いておく。

兎に角、アスカの言葉は私の懸念を揺らすには十分な真実味を帯びていた。

戯言とは思えぬ雰囲気。

そして、前提としてあるMM元老院の一部勢力の不穏な動き。

彼女を信じてみる価値はある。

私は即座にフィオネに一部勢力のメンバーの調査を依頼。

日が変わる頃には調査結果が出る筈だ。

だがカフェで話したのは昼頃。

まだ日が変わるまでは時間がある。

だから、

「待つ間、折角ですし夕食でも一緒にどうですか？とは言いましたか……」

「おおこの飯異常に美味えぞ、アスカ！？」

「コッチのもなかなかだよー！？ねえ、アスカも食べてみる？」

「ん……」

もつやりたい放題である。

ここは自宅の1つである高層ビルにある食事用の一室。天上から吊るされるのは煌びやかに装飾されたシャンデリア。それはテーブル上の食事を照らし、優雅さを演出する。筈だったのだが――。

……どれだけ食べるんですか、この人達は……。

今ではそのシャンデリアに挑まんとばかりの勢いで皿が積まれている。

思わず額に手を当てて背後を見る。

肩まで茶の髪を伸ばしたメイドの1人が部屋の隅で引き攣った笑みを浮かべていた。

流石にここまで豪快な客は彼女も相手にした事がなかったらしい。

ラオ・バイロンにラン・ファオ。

彼らの名は高級店に連れて行ってはいけないリストに載せておくとう。

「しかし、悪いな。こんな美味いもん食わせて貰ってよ」

「でしたら少しは遠慮してくれませんかね？」

「うめえな、この良く解らんパリパリしたやつ」

「無視ですか。無視なんですか」

ラオはそっぽ向いてムシャムシャと食事を再開した。

コッチヲミロオ。

「でもこんなのんびりしてていいのかな、英雄の子ども達が狙われているんだよね」

代わりとばかりにランが食事の手を止め、コチラを見て問う。

その問いを1度手で制すとメイド達を部屋の外へ下がらせる。
関係者以外の退出を確認すると、改めてランへ視線を向け、

「ええ、そうですね。しかも悪魔の軍勢を使って、等という大胆な方法で」

「早く会いに行つて護衛した方がいいんじゃないかな？」

彼女は首を傾げながら問いを続ける。

意見としては至極真つ当なものだ。

「既に必要最低限の護衛を密かに向かわせています」

「……どれくらい？」

「私の手勢の中では選りすぐりの精鋭を3人程」

「少なっ！？」

失礼な。

これでも現状で即座に動員出来る人員としては最大。

ゲートの確保、対悪魔用の武具の調達にも最速の働きをもって対応。

かなり頑張つた方なのだ。

「それに余り多くの手勢を動かしては相手側に計画を先延ばしにされる可能性がある」

「？先延ばしにされるんなら、いいじゃないかな？」

「先延ばしにするという事は密かに狙われ続けるという事ですよ、お嬢さん」

「あー……もしかして、囷作戦？」

「非常に心苦しいですが、その通りですね」

思わず顔を顰めながら答える。

そう、MM元老院内の危険因子を潰すなら今なのだ。
英雄の子ども達を害するというならば、彼らを排除する名分も立つ。

「フィオネ君には怪しい動きをしている議員が居ないかを調査して貰っています」

「成程。悪魔召還の儀式と違って結構大仰な準備が必要だから――」

「ええ、資金や人員の動きさえ見れば、不可解な点が必ず見つかる筈です」

「時間的な猶予は？」

「雪が降る時期という彼女の言を信じるならば、まだ余裕があるかと」

「ふむふむ。成程成程……じゃあ、今から炙り出し＋護衛の増員をしていけば」

「襲撃を事前に潰す事が出来るという訳です」

「流石議員さん、黒いねえ……」

「フツ、それ程でもありませんよ」

「アハハハ」

「フフフフ」

この妖精、一見陽気で何も考えていない様に見えるが、どうやら相当頭がキレる。

ふむ。この騒ぎが収まったらスカウトしてみますか。

相棒のラオもかなりの手練の様だし、無駄にはならないだろう。

「……おや？アスカ君、何故震えてるのですか」

ランと私が笑いあっていると何故か視界の端で小刻みに震えるアスカの姿。

はて、なにかしただろうか、と首を傾げる。

原因が不明なのはランも同様の様で、首を傾げていた。
再び、アス力を見る。

彼女は相変わらざるの無表情のまま、しかし、しっかりと口を動か
し、

「なにか、怖い」

「失礼します！」

アス力の眩きと同時に扉が勢い良く開かれる。

驚きの感情と共に音の発生源を見れば、そこには荒い息を吐き出
す――、

「フィオネ君？」

「お食事中、申し訳ありません。ですが、緊急事態です」

白い肌に珠の様な汗を伝わせながらも、フィオネは歩を進めてく
る。

その表情は眉を立て、表情筋を強張らせたものだ。

彼女の状態からして、並みではない問題が発生した事が把握出来
る。

嫌な予感がする。

まさかアス力が先程怖い、と言ったのはこの予感に関係が――？
背筋が震えるが、止まっている暇はなさそうだ。

「人払いはしてあります。どうぞ、続けてください」
「では」

彼女はテーブルの空いた場所に紙の束を置き、

「ウェールズの山中にある村、その襲撃まで残り、2時間です」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

「あと2時間です」

ふう、と額に指を当てる。

ハハハ、フィオネ君は何を言っているのだろうか。

まだウェールズに雪が降るまで猶予があるって予報士も言っていないか。

冗談が上手いな、フィオネ君。

「じよつ、冗談じゃありませんわ！これは事実です！ちゃんと調べました！」

「ハハハ、ナニモキコエナイ」

「おい、クルトのヤツ、完全に現実逃避してるぞ」

「そういうラオもそれ肉じゃなくてコップだからね？ 噛み砕かないでね？」

⌈
⋮
⌋

「アスカ？それワイン！ワインだから！ジュースじゃないから！？
ラッパ飲みしちゃうめえええええええ！！！」？」

阿鼻叫喚である。

それを見たら逆に落ち着いてきた。

「どういう事ですか、フィオネ君」

「ええ、どうやら計画が早められたらしく……」

「止められなかったのですか？」

「計画の動き自体は直ぐ掴めたのですが、1週間前から準備が始まっていた様ですの」

彼女は息を整える為に胸に手を置き、深呼吸。

再度表情を引き締め、全員を見渡した後、

「先程ゲートを使って召喚魔法に特化した刺客達が旧世界に向かったとの事ですわ」

「何故、その様な事に。まさかコチラの動きに気づいて？」

「いえ、気づかれてはいなかったみたいですわ。ただそれとは別の

――」

「そこから先は原因である僕が話そう、フィオネ君」

「む？」

入り口から響く、男の声。

何時の間に入ってきたのか、彼はそこに居た。

灰色のスーツを無駄なく着込み、これまた無駄のない動作で歩く男。

白い短髪の下ではアンダーリムの黒縁眼鏡がキラリと輝いていた。

その男は――、

「タカミチ……？」

アスカの口から呟く様にして、彼の名が漏れ出した。

第7話 クルト・ゲーデルの思案〜MM元老院の陰謀添え〜（後書き）

今回も短めです。

ここまで見てくださった方々に最大限の感謝を。
次は休み中に投稿予定です！

一気に話を動かす為、急展開・超展開だらけですが、
お許しください、クルト議員！

次回か、次々回辺りになりそうですが、早くネギを出したいなあ。

第8話 加速する陰謀！原因はデスメガネ！？

■ 前回のあらすじ

> i 3 7 6 8 7 — 4 5 1 4 <

（ 上記画像はイメージです ）

■ Side：転生者アスカ

突如として静寂が部屋に満ちる。

視野に入るのは、5人の男女の姿だ。

彼らは皆一様に意表を突かれたかの如き表情を見せ、どういいうわけか私に注目する。

訪れるのは一呼吸の間。

来たるは全てが停止したが如き時。

誰も動かない。

果たして何時終わりを見せるのか解らぬ停滞。

ただ天上から吊られたシャンデリアのみが僅かに揺れた。

その動きにシャンデリアの装飾同士が擦れ合い硬質な音を立てる。
停止した時の最中、心中で己へと問いかけた。

……何故。

疑問に小首を傾げる。

だが、動作の次の瞬間、僅かな思考をもって脳裏に雷鳴が轟く。
原因が理解出来たのだ。

成程。これが原因ならば、皆が固まるのも納得がいく。

つまりは——私のあまりにも失礼な行動に皆啞然としてしまっているのだろつ。

確かに先程吐き出した言葉を脳内で反芻してみれば礼を失している事は明白だ。

つまりこの静寂の原因は――、

……確かにいきなり呼び捨てはいけないよな……！

『そういう問題じゃったの！？』

何故身体を仰け反らせて驚くのですか鯛様。

初対面の人を、許可なく呼び捨てにするのは礼儀的によろしくない。

一般人ならば誰しもが持つ常識だ。

故に失礼を詫びる為にも席を立ち、タカミチへ向き直る。

続く動作として、謝罪の念を伝える為、出来るだけ恭しく頭を下げた。

「ごめんなさい。タカミチ、さん」

『いきなり名前呼びも馴れ馴れしくないかの？』

……細けえ事は良いんですよ！！

『ええ！？言ってる事が支離滅裂じゃよこの娘――！』

娘じゃねえし！慣れたけど心はまだ多分恐らくきつと男だし！

……っていかん。鯛様と漫才をやっている場合ではなかったな。

見れば、周囲の皆も目を点にしている。

特にタカミチは更に呆然という要素をプラスした様な顔をしていた。

ふふふ、私の礼儀正しさに恐れ戦いているんですね。解ります。だがこのままでは話が進まない。

先程フィオネから齎された話を信じるならば、時間もないのだ。

どうぞ、と掌で話の続きを勧める。

「とりあえず、話の続き」

「あ、ああ。すまないね……気になる事もあるけど、時間もない」

彼はネクタイの結び目を軽く片手で直しながら、

「まずは久しぶりだね。クルト」

「直にこうして顔を合わせるのは2年ぶりか」

「そうだね。そちらの2人は？」

「アスカ君の仲間だそうです」

「アスカ君？」

はい、と手を上げる。

タカミチの表情がまた驚の色に染められる。

しかしそれでも狼狽している風には見えない。

というか、逆に落ち着いてコチヲを観察している様な気もする。
うーむ。原作開始時よりかなり若く見えるが、やはりダンディ。

『ああいうのが、お主の好みか？』

……うーん。好みというか……憧れはするなあ。格好良い漢って感じで。

『フッフ、甘いいう。その憧れが何時しか恋愛感情に変わって行くのじゃよ……！』

……明日菜さんの事ですね、解ります。

『ほうら、お主もあのダンディさに甘えなくなる甘えなくなる……鯛の活け造りって美味しいですよね。』

『さあー！早くネギを助けにいかんとなあ！？』

ウッフ、鯛様ったらあんなに青い顔して張り切っちゃって。

私も頑張らないとな。うん。

おや、意識を戻せばタカミチがラオとランの前に立って握手を求めている。

「2人とも、僕は高畑・T・タカミチ。どうぞよろしく」

「おう、俺はラオ・バイロンって言っただよろしくな」

「私はラン・ファオだよー！って、あれ？タカミチってもしかして？」

「あー……うん、多分君の想像とあってるかな？」

「うええ！？や、やっぱりあの有名な人！？」

「なっ、マ、マジか！？」

狼狽するラオとランに苦笑するタカミチ。

その様子を見て、クルトが口元に笑みを浮かべながらその肩を叩く。

「すっかり有名人だな、タカミチ」

「君もかなり有名になってると思うけどなあ、クルトMM元老院議員？」

「止めてくれ。どうせ薄汚れた肩書だ」

「そう言っなよ。それでもクルトやフィオネ君が頑張った結果だろう」

「む。まあ、な」

「あらあらまあ……男同士の友情、素晴らしいですね」

良いなあ。ほんわかしてるなあ。

だが――、

「本題」

「ハッ！？」

皆、今絶対、現実逃避気味になってましたよね。

「いや、アス力君。すいません、少々混乱していた様です」

「わたくしも同様ですわ……」

クルトとフィオネが同じ様な動作で額に手を当て現実の重さに顔を顰める。

「私は忘れてないよ！うん、忘れてないよ！？」

「ああ、うん！そうだな！お、俺もだぜ！？」

ハハハ、こやつらめ。

「ラオ、ラン」

「「スンマセン」」

現実を見るのって大切ですよね。

「それで、タカミチさん」

「ん。すまない」

タカミチが表情を正し、全員へと1度ずつ視線を向ける。

そして眉を立てた上で彼は小さく息を吸い、

「手短に話させて貰うと、襲撃計画が早まったのは僕のせいだ」

放たれた言葉に全員が硬直する。

だが、余計な問いを投げる時間が無い事はここにいる全員が解っている。

故に次の行動が起きるのは早かった。

まず動いたのはクルトだ。

彼は顎に手を当てながら、タカミチを真っ直ぐ見据え、問う。

「……何かMM元老院議員に対してアクションを仕掛けたのか？」

「いや、直接的には何もしていない。だが——」

「だが……？」

タカミチは目を瞑り、首を左右へ振る。

「メガロメセンブリアを訪れた際、僕は偶然とある賞金首を見つけ
て拿捕したんだ」

「賞金首は、悪名高いテロリスト一味の構成員でした。しかも幹部
レベルの」

フィオネがタカミチの言葉を引き継ぎ続ける。

「そして、そのテロリスト一味の主な手口は——都市中心部での大
量の悪魔召喚」

「……まさか」

全員が同時に息を呑む。

「ええ、そのまさかですわ。わたくしもまさかと思っていたのです
が……」

彼女は宙に指を走らせる。

指の動きを追う様に表示されるのは幾つもの情報を載せたウィン
ドウだ。

「案の定、少々頭の中を覗かせていただいたら、襲撃計画の内容が出て来ましたわ」

「メガ口で捕まえた男がこんな計画に参加しているとは思わなかったけど……」

タカミチの口から漏れるのは溜息だ。

「僕が何故、魔法世界へ来たのか——その目的を秘密にしていたのも悪かった様でね」

彼はそこで一旦言葉を区切り、溜息を1つ。

「彼らは僕が襲撃計画を潰しに来たと勘違いしたらしいんだ」

「Oh……」

遠い目で窓の外を見るタカミチ。

なんというスレ違い宇宙……。

タイミングが悪かったというべきか。

やっている事は至極真つ当。素晴らしい事なのだが……。

ともあれ、つまりMM元老院議員の一部勢力はこう考えたのだろう。

？ かの有名な高畑・T・タカミチが計画の一員である賞金首を拿捕した。

？ まさか奴は我々の計画に気づいたのではないか……？

？ ならばいっそ、奴が現実世界に帰らぬ内に計画を終わらせてしまおう。

？ 誰だつてそーする俺だつてそーする↑イマココ。

「行方不明のアスカ君を探していた筈なのに、まさかこんな大事に

なるなんてね……」

「嘆いても仕方ありません。今早急なゲートの開放を要求していますわ」

「それまでは何も出来ない、か……歯痒いな」

頭を抱えるタカミチをフィオネが労り、クルトが歯を強く噛み締める。

それを見ながら、先程、皆が放った言葉を思い返してみる。
なんか引っかけた単語があった様な、なかった様な。

……ってあれ？なんかタカミチさんの言葉に気になるところがあったよーな。

『思いつきり、お主を探していた、って言ってたのう』

……あつるえー？どういう事？

『もしかして……お主は研究材料として捕まっていたのではなく』

……保護されてた？

『うむ！そういう事かもしれぬな！』

ハハハ、と鯛様が笑う。視線を逸らしながら。

ガッデム！という事は計画が早まったのも私のせいか！？

思いつきりやらかした！？

ああもう、五体倒地土下座連発しても足りない心境である。

タカミチさんを筆頭に迷惑かけ過ぎてすいません——ッ！

「アスカ！？」

「ど、どうしたの急にテーブルに頭を叩きつけたりして……？」

「……ナンデモ、ナイヨ」

ウフフ。そう思うとプリオラとかには非常に悪い事をしたな……。
保護対象が何の前触れも無しに脱走するとか予想外にも程がある

だろうし。

きつと酷く怒られたに違いない。
今度会ったら謝らねば。

うむ、と決意を胸に刻みつける。

私、今度プリオラに会ったら謝罪するんだ……。

「――！」

……む？なんか廊下の方が騒がしいな、って、扉が勢い良く開け――！！？

「高畑さん！ランベルツさん！たたた、大変よ！」

扉の前には頭に1対の角を生やした金髪の女性が居た。
スーツの上に白衣を着た見た目麗しい、既知の人物だ。
彼女は肩で息をしながらも、懸命に言葉を喉から捻り出そうとしていた。

……。

あ。うん。えっと……。

どうも、プリオラさん……。

。

■Side：高畑・T・タカミチ

名を呼ばれた瞬間、僕は心臓の音が止まったかと思った。
聞き慣れた響き。

共に住んでいる少女と同様の呼び方。

その響きは確かに記憶に刻まれている。

正に少女——神楽坂明日菜の時を逆戻しにしたかの様な容姿の存在が其処には居た。

だが、と頭を振る。

……彼女はアスナ君じゃない。

記憶があるうと彼女をアスナ姫として見るのは、彼女という存在の否定だ。

故に1個の人間として、彼女を見据える様とし、

「ごめんなさい。タカミチ、さん」

再度呼び直された名に、またも硬直する事となった。

だが同時に納得する。

彼女が目覚めてから数日。

あの研究所から脱走した後、どのような旅路を超えて来たのか想像もつかない。

が、彼女は恐らく、その旅路の中で自分は明日菜では無いと自覚したのだろう。

見た目は現在の明日菜よりかなり小さい。

しかし、中身においては、そうではないのかもしれない。

否。こうして冷静に己の言動を見つめ直す姿は、確実に幼子とは呼べないだろう。

……まさかメガロセンブリアに一旦帰って来たら、遭遇するとはね。

更にMM元老院の一部勢力が画策する計画についても知る事になるとは。

予想外にも程がある。

されど世の中には予想外を上回る予想外な事もあった。

なんとフィオネ君は、悪魔襲撃の計画について目の前の少女から聞いたという。

「何故そんな」未来を予知した様な事」が言えるのかは解らない。だが、フィオネ君は信じると言った。

勿論、僕は何故と問うた。

彼女は笑顔で、信用に値する人物だからと返した。

ならば何故計画を知っていたのかという、余計な詮索は不要だ。

フィオネ・ランベルツは僕の知る誰よりも思慮深いと確信出来る人間だ。

その情報収集能力、相手の思考を読み取る魔法の腕は右に出る者が居ない程。

犯罪者にも頭覗いちやらめええええ！とまで恐れられる彼女である。

プライバシーなんて無かった。

彼女信用に足るというならば、その計画は存在していたのだろう。けれど、計画の情報に対する信用と目の前の少女への信頼は別問題だ。

故に自身でも彼女が信用できるかどうかは確かめねばならない。

「とりあえず、話の続き」

「あ、ああ。すまないね……気になる事もあるけど、時間もない」

僕の思考を遮る様に少女が話を促す。

彼女への意識を離せずにはいたものの、周囲の皆へ挨拶を済ませる。

途中、少女——アスカの名前が明らかになった。

これにはまた驚いた。

まさか彼女が自分で自分に名前を付けていたとは。

恐らく、彼女は自身を明日菜と違う存在として割り切る為に名を

付けたのだろう。

名前が1文字違いというところには僅かに幼い安直さが見てとれる。

ちょっとだけだが、微笑ましい気持ちになれた。

その気持ちを胸に抱いたまま、思わず話を続けてしまう。

だがしかし、それはアスカの一声で止められた。

いかん。話が盛り上がり過ぎたか。

クルトとフィオネはアスカに謝罪する為に頭を下げる。

ラオとランは誤魔化そうとしていたが、アスカに名を呼ばれ撃沈していた。

……本当に、子どもなのか？

若干疑念は沸くが、アスカに再度話を促され、今度こそ本題に入った。

今思えば、何故あの賞金首がメガロメセンブリアに居たのかを考えなかったのか。

アスカの事で頭が一杯だったとは言え、不甲斐ない。

だが今は悔やんでいる時ではない。

それから幾つか皆と言葉を交わし、経緯を説明した。

本来なら、こんな事をしている暇はない筈なのだが……。

……ゲートが開かない限り、何も出来ないというのは悔しいところだな……。

思わず顔を顰めると、クルトも同様の思いを怨嗟の様に吐き出した。

果たしてゲートを使って移動した後、全速力で急行して間に合うのか。

クルトの部下達や村の魔法使い達が持ち堪えてくれれば良いのだ

が。

……悪魔の量と質にもよるか。

悪魔召喚の実行者である組織は以前爵位持ちの悪魔を召喚したという記録がある。

そんな化け物が召喚されてしまえば、村の皆は一溜りもないだろう。

だからこそ、急がなければならない。

だが、急ぐ事は出来ない。

まさかこの様な状況になると誰が予測し得ただろうか。

……アス力君もここまでは予測して居なかった――。

直後、鈍い音が響く。

肉と硬い物体がぶつかり合った音。

発生源へと皆の視線が集中する。

音を生み出したのは、アス力だった。

彼女の表情は見えない。

ただ座った状態のままテーブルに頭を叩きつけて、小刻みに震えていた。

会ってから表情を微動だにさせなかった彼女だったが、今の様子を見るに、

……怒っているのか？

怒りが誰に向けられたものなのか。

やはりこの様な状況を作り出してしまった僕か。

それとも計画を早めたMM元老院議員の一部勢力へか。

答えは彼女の胸の内だ。

僕はなんと声をかければ良いのだろうか。
いや。今、僕がかけられる言葉は無いか。
弁明は後で良い。

今は行動で示すのみ。

ゲートが開き次第、全力を尽くさねばなるまい。
ウェールズの山中の村に済む人々を救う為に。
そう思いを定め、胸ポケットからタバコを取り出そうと――、

「高畑さん！ランベルツさん！たたた、大変よ！」

したところで、唐突に扉が開け放たれた。

全員がポカンとした表情で視線を集中させれば其処に居るのは、

「プリオラ君？」

数時間前、アスカが発見されたと聞いて飛んで来た女性の姿があった。
つた。

いやまあ、数時間で飛んで来れる距離じゃないよね、此処って。
聞いたら転移と愛の力です！って言っていたが。

愛の力って凄いなあ、うん。

そんな風に納得しているとクルトの横でフィオネが首を傾げた。

「プリオラさん、貴女はゲートの準備をされていた筈では……？」

「そそそそ、それがね！あの、その、なんというか！」

「とりあえず落ち着いてくれ。はい、水」

「あ、どーもんぐっんぐっ！ぶはーっ！……！」

差し出した水が勢い良く飲み干された。

その様子を見ながら、何故彼女が此処に来たのだろうか。

確かに此処に行くとは言っておいたが……。

疑問の視線を向けると彼女はその上でスーツと白衣を正し、

「ゲートのシステムになんらかの罠が仕込んであったみたいで」

瞬間、嫌な予感が脳裏を過ぎり、背筋を冷やす。

死神の鎌を首に突き付けられた様な感覚。

「一時的にシステムダウンしてしまった様なの……！」

果たしてその予感当たった。

否。当たってしまった。

「最悪だ……！こうも後手に回るとは！」

「これではとても計画の実行時間までには……ッ」

クルトが頭を抱えて呻く。

フィオネも苦虫を噛み潰した様な表情だ。

かく言う僕も恐らくは似た表情を浮かべているだろう。

ラオとランは呆然と言った色を宿した顔をしていた。

そして、アスカは――、

「まだ諦めるのは、早い」

感情を見せない顔をコチラへ向けていた。

堂々と、困惑も、狼狽もせず。

暴風が吹いたとしても決して揺るがぬ大樹の如く。

額が赤いのはご愛嬌。

そして、全員を見据えながらただ言葉を紡ぐ。

「諦めたら、そこで試あ――終わり」

「だ、だけどね、アスカ。ゲートが壊れたんじゃ向こうに行く手段が……」
「ある」

ランの言葉に即答するアスカ。
返答に全員が目进行剥く。

「恐らく貴女が言うならばあるのでしょうか。どうやって、ですの？」
「私が、ゲートを作る」

フィオネの問いに対する返答をアスカはまたも淡々と告げる。

「無茶だ……ゲートは数百人規模で手をかけても修理に数年かかる代物なのですよ？」
「出来る」

クルトの疑問も当然の事だ。
だが、彼女はそれにすら端的に应えるだけ。

「信じて」

瞳に宿る光に揺るぎは無い。
何故断言出来る程の自信を持つのか。
個人でのゲート作成等という馬鹿げた真似が本当に出来るのか。
疑念は尽きない。
されども、

……今はそれに賭けるしかないか。

故に僕は頷いた。

「アスカ君。ゲートの作成に必要なものは？」

「タカミチ！？」

クルトが信じられないといった目を向けて来るが、視線を返して制する。

再度アスカを見れば彼女は頭を左右に振り、

「ない。ただ、数人しか、連れて行けない。此処に居るメンバーで、良い？」

「クルトに、フィオネ君、それと僕だね。後は……」

「乗りかかった船だ！俺も行くぜ！」

「私も行くよ！」

ラオとランが声を上げる。

……意気込みはありがたいけども、魔法世界の住人は――。

魔法世界から出る事は出来ない。

それはこの世界で定められた絶対のルールだ。
だがしかし、

「ありがとう。ラオ、ラン。じゃあ、お願いする」
「なっ！？」

アスカはなんという事も無い様に彼らに向けて僅かに、本当に僅かだが微笑んだ。

「ア、アスカが笑った！？」

「お、おい！カメラ！カメラ持ってこい！」

「ないですよ、そんなもの。アスカさん、言っておきますがこの方達は――」

「大丈夫。世界移動の際に、身体を、再構成する」

「なっ」

クルトが啞然とするが、アスカは彼に頷きだけを返した。

「再構成？」

「ん？えっ、何？分解されちゃうの？」

「気にしない」

「アスカがそう言うなら気にしないで大丈夫だな！」

「うん、そうだね！」

「貴方達、ちよつとこの子に傾倒し過ぎじゃありませんか！？」

アハハ、なんだかクルトのヤツ、ツッコミが冴えてるなあ。

MM元老院では凄まじいやり手を通っている様だし、色々不足していたのだろうか。

主に”紅き翼”時代の様な馬鹿騒ぎ成分が。

まあ、とりあえずは、

「それじゃあ、装備を整えて10から20分後に出発かな？」

疑問符にアスカは首肯。

「あと3、4人なら、大丈夫。もし連れて行きたい人が居るなら、呼んで」

「解りましたわ。では、早急に精鋭を4人呼び寄せます。ラオさん、ランさんが居たのは僥倖ですわね……聞く話では腕の立つ拳闘士という事ですし」

ほう、と僕とクルトが声を上げる。

これは確かに僥倖だ。

この世界の拳闘士と言えば、”本物”に近しい、かなりの実力を
持つ猛者達の事だ。

というか何時の間に調べたんだ、フィオネ君。

「照れくさいねえ……ま、頑張らせて貰うぜ」

「私も頑張るよー！あ、ちなみに私は杖持ち歩いてるから何時でも
大丈夫だよ！」

「僕は上着のポケットがあれば問題ないかな」

皆の最後に付け足す様に言った後、頭を抱えるクルトを見る。

どうする？という意思を籠めた視線を送ると、彼は溜息を吐き、

「私も刀を用意してきます。全く、非常識な話ですが——今はあり
がたいですね」

苦笑をしながら、背を向けてフィオネと共に退出して行った。

さて、悪魔退治か……久しくやってないけど、僕も頑張らなくち
やな。

第8話 加速する陰謀！原因はデスメガネ！？（後書き）

原因はデスメガネ！？ アスカ「私です」

まずはここまで見てくださった方々に最大限の感謝を！

そしてあげましておめでとう御座います！

今年もどうぞよろしくお願い致します！

……しかし陰謀パートだと話の進みが遅いですね、注意せねば。

次回からは一気に話が加速しますので超展開連発やもしれません…

…！

ご感想などがありましたら、是非、お願い致しますっ！

2012/01/01（日）

・第3話：台詞を以下の様に修正。

『まだの様じゃな。季節的にウェールズは今、秋の様じゃのう』

『まだの様じゃな。季節的にウェールズは今、1月中旬、冬真っ盛りの様じゃのう』

・第8話：タカミチの明日菜の呼び方を修正。

『明日菜君』 『アスナ君』

・第8話：タカミチと明日菜の現状を修正。

『明日菜から既に高畑さんと呼ばれて別居している』

『明日菜からは名前で呼ばれ、現在同居中』

第9話 その手で掴め、幸せを！ハッピーエンドを返して貰いにきた！（前）

■Side:????

世界を満たす色は揺らめく赤。

眼前には果てなく広がる荒野。

赤に染め上げられた大地。

空に光は無く、身を包む空気にすら重圧を感じる。

自然、胸が苦しくなり、息が荒くなる。

胸元に手を当て、なんとか呼吸を整える。

が、そんな対処は一時凌ぎにしかない事は明白だ。

重圧の原因であるこの空間を脱出せねば。

不鮮明であつた意識を頭を振る事で明確にし、周囲を観察する。

まず視界に入ったのは、黒い十字架だ。

それは大地に墓標の如く突き刺さった樹木。

身は枯れ、朽ちて所々が抉れた姿が一層、世界を不気味な物へと

変じさせる。

何で私達はこんなところに居るのか。

解らない。

解る筈もない。

先程、私達は姉に就寝の挨拶をしてベッドに潜り込んだ。

それだけだ。

それだけで次の瞬間にはこの世界に足を踏み入れていた。

不意に腕の中で動きが生まれる。

視界の下部で揺れるのは、赤髪。

「お姉ちゃん……」

頭を動かして、視線を下にずらす。

そうして視界の中央に入るのは可愛くて仕方ない私の弟だ。弟は私を見上げながら、瞳を不安げに揺らしていた。

「大丈夫。大丈夫だからな。お姉ちゃんが守ってやるから」

弟の頭を撫でて宥めながら、再度周囲を見渡す。

四方どれも酷似した風景しか広がっていない。

長居すると方向感覚すら狂ってしまいそうだ。

……くそつ、本当になんなんだ、これは……。

心中で絶叫する。

だがそれは理不尽に嘆く絶叫だ。

原因等、疾うの昔に解っている。

この様な不条理極まりない現象。

それを発現させるものなど、私は1つしか知らない。

それは——”魔法”だ。

一般人が聞いたら、嘲笑と共に一蹴される答えだ。

だが、私はその存在を知っている。

魔法が確かにこの世界に在る事を知っている。

故に私の理解は早かった。

この世界は恐らく何者かが魔法を用いて作り出した異界。

其処に私達は閉じ込められたのだろう。

現状を説明するにはそれしかない。

原因が解ると共に、自然と己の知識と現状が繋がる。

……もしかして、父さん関係か……？

私達は両親の顔すら知らない。

されど父親の俗称は聞き及んでいる。

”戦争を終結させた英雄の中の英雄”。

父親の方はそう呼ばれていたらしい。

母親に関しては俗称どころか、容姿すらも解らない。

聞いても誰も教えてくれないのだ。

私達に甘くて優しい姉ですらやんわりと誤魔化す程だ。

……いや。母さんの事は今は良い。

頭を振り、脱線した思考を元に戻す。

当の問題は父親の通り名だ。

恐らく”英雄”と呼ばれているからには、過去に色々とやらかしたのは間違いない。

味方からは賞賛されようと、敵方から恨まれるのは必定。

戦争の中で生まれ出た英雄だというのなら尚更だ。

戦争を終結に導いたという父親の事は尊敬している。

尊敬はしているのだが。

……こんな事態になるのは予想外だろう……。

とにかくと心中で前置きを1つ。

弟を軽く抱きしめて、立ち上がる。

現状は2人して頭から薄い布団を被った状態だ。

実に布団が重い。

邪魔である。

故に身に纏っていた布団を払う様にして取り払う。

景色は事前に見回した時と変わらず。

ひたすらに無人の荒野が広がるのみだ。

……つつ、心細い。

だが弱音を吐いている暇など無い。

私には守らなければならぬ者が居るのだから。そう思うと同時に僅かだが、身に力が入る。

逆に力が入り過ぎたのか、腕の中の動きが少し強まった。

見れば、弟が若干の涙目で私を見上げている。

上目遣いで。

上目遣いで。

ええ、上目遣いで。

……。

ハッ！？

ど、どうしたんだい、我が弟よ。

「お姉ちゃん、足が冷たい……」

「あ、えつと、おんぶしてやろうか？」

「うー……がんばる。お姉ちゃんは大丈夫？」

「ああ大丈夫さ。お姉ちゃんは強いからな」

「んう……お姉ちゃんはやっぱり凄いや」

頭を撫でてやると弟は小さく声を漏らし、柔らかな笑みを見せる。
クツ、可愛過ぎる！

なんとという精神的破壊力だ。

こんな場所でなければ愛でまくってあげたというのに。

誰だこんな所に私達を叩き込んだのは！？

「私だよ」

「御帰り下さい」

心を読まれたと思ったなら、なんか立派な髭のナイスミドルが背後に現れたで御座る。

黒いハットに黒いコート。

その下には黒いスーツに黒い手袋。

なんという完全装備の不審人物……。

突如として出現した男は左右に跳ねた髪を僅かに整えながら言う。

「君達が標的か」

「標的……？」

拙い。この男は殺し屋か？

そうだとすると非常に拙い。

私達が頼れる存在は周囲に存在しない。

もしかしたらという程度の可能性が存在ならば、一応なら居るが。と、視線を右肩付近で白い翼をはためかせる金髪天使に向ける。

彼女は肩程まで伸びた髪と天使の輪を首を傾げる動作で揺らす。

……オイ！なんとか出来ないのか天使だろ、お前！

『ううう、む、無理ですーッ！私からは手が出せませんーッ！』

……くそう！天使だっていうのになんて役立たずだ！

『酷ッ！？酷いですよ！？確かに悪いとは思いますが、理不尽な酷さ！』

……やかましい駄天使！

『なんか格好良い響きですけど、釈然としませんよ！！？』

残念ながら我等が天使様は役に立ちそうにない。

彼女はただ白のローブの裾を風に泳がせるだけだ。

なればどうするか。

どうすれば逃げ出す事が出来るのか。

「なに。警戒する事はない」

「……何？」

男が人の良さそうな微笑を浮かべる。

世界の様相と真逆の温かみを持った表情だ。

その変化に、思わず期待を寄せてしまう。

もしかしてこのナイスミドルは私達に危害を加えるつもりじゃないのかもしれない。

「ちょっと数十年石になっていて貰っただけだからね」

「どこが警戒しなくて大丈夫なんだそれ——ッ!？」

思わず両手両足を地面に叩きつけながら項垂れる。

期待した私が馬鹿だった。

ちよつとでも希望を持った私が愚かでした。

落ち込む私を尻目に男は片手の人差し指を立て、左右に振りながらウイंकを1つ。

「フッフ、ちよつとしたオジさんのオチャメさ」

「♪じゃないだろ!? この悪魔! 鬼! 近づくな! うわーん!」

「お、お姉ちゃん落ち着いて!？」

「いや、悪魔だが鬼では……って暴れてないで人の話を聞いてくれないかね？」

やっぱり悪魔なんじゃないですかやだー!

また死にたくないー!

「あー……少年。どうか少女を泣き止めさせられないかね? 泣く幼子は苦手だね」

「うう、すいません。お姉ちゃんこうなると中々帰ってこなくて

……」

「何朗らかに会話してんのそこ!？」

思わずツツコむと悪魔的ナイスミドルは笑顔で喜んでくれた。
とても良い笑顔だけど、嬉しくねえし！

その後、彼は親指を立てた右手を突き出し、

「ああ、帰ってきたかね。大丈夫痛くないよ。ちょっとピカッとするだけだからね」

「何その注射をしますからねー的なノリ！？」

「ちゅ、注射！？注射はやだーッ！？」

ああ、我が弟まで涙目に！？

この悪魔的ナイスミドルめ、許されざるよ！？

「じゃあ、そこから動かないようにしたまえよ？」

「え？口からなの？口からなんか吐き出すの？」

「お姉ちゃん！あのおじちゃん口が光ってるよ！怪獣みたい！」

そうだなあ。どこかの特撮の怪獣みたいだなあ。

ははは、こんな時にそんな事が言えるだなんて我が弟は大器だなあ。
あ。

涙の痕が頬に薄っすら残しながらも瞳を輝かせる姿も可愛いなあ。

「では行くぞ——石化の」

「つて、現実逃避しとる場合かア——！？」

「お姉ちゃん！？」

弟を引っつかんで全力で横に飛ぶ。

転がる様な形になってしまったが、真横を巨大な光線が通過する

事を確認。

脳裏に浮かぶのは回避成功の4文字。

自分の判断が間違っていなかった事を確信する。

「おや。年の割には見事な避けっぷりだね。ううむ、惜しい資質の持ち主だ」

「惜しいと思うなら見逃してくれないか!？」

「ハハハ、仕事だから無理」

「デスヨネー」

ガッデム、神は死んだ！

『神様達なら元気にやってますよー?』

……そういう意味じゃねえー!？

どいつもこいつもボケキャラばっかか!？

ええい!もうこうなったら破れかぶれだ!

こうなったら弟を連れてどこまでも逃げ、痛あつ!？

「あ、足が……!」

「お姉ちゃん!？」

「おや、どうやら無茶な避け方をしたせいか、足首を挫いた様だね」

うわぁ!近づくな!近づくなこの変質者あ!

「お、お姉ちゃんに酷い事するな!」

「ばっ!？馬鹿!無茶をするな、逃げろ!」

両腕で抱きしめていた弟が私の拘束を解き、駆けた。

男と私の丁度中間辺りで止まり、両手を広げる。

私を守っているつもりなのだろう。

だが足が震えている。

怖いのだろう。

そりゃそうだ。怖くない筈が無い。

コチラからだと背中しか見えないが、恐らくは泣きそうになっているに違いない。

そんな姿に勇気付けられ、立ち上がろうとしたが中々足に力が入らない。

動け。

早く動け！

「ふふ、美しい姉弟愛か……私は好きなのだがね」

「感銘を受けたなら見逃し——」

「駄目だよ」

「デスヨネー」

畜生、神は（ry）

だが会話で時間を稼げば立ち上がるだけの時間が得られる。そう思っていた矢先だった。

男は私が完全に立ち上がる前に再度口に光を灯す。

「これが仕事でなければな……まあ、運が無かったね。一緒に石になりたまえ」

「止め——ッ！」

「う——ッ！」

急いで飛ぶ様にして手を伸ばすが、足の痛みで一瞬動きが鈍る。弟の背に届かない。

世界が白黒になる中、男の口から放たれる光が強さを増す。

あ、駄目だ。

これは終わった。

足が砕けても良い。

せめて弟だけでも。

弟だけでも守らないと。

スローモーションになる世界。

痛む足に無理矢理力を入れる。

跳ぶ準備だ。

弟を体当たりで地面に伏せさせて、自分が盾になる。

これしかない。

決断と共に全力で地を踏みしめた。

瞬間、白い光が、

「悪魔ビームばらアツ!？」

「!？」

発射される事は無かった。

男が側転の如き動きで勢い良く吹き飛んで行ったのだ。

「へ……?」

「あ……う……?」

何が起きたのか全く理解出来ない。

唐突過ぎる展開に思考が停止する。

体勢は足に力を込めて、まさに飛ぶ直前。
痛い。

痛みを思い出し、思わずその場に蹲る。

ヘタリと弟も目の前で座り込む。

恐らく緊張が解けたせいで足に力が入らなくなったのだろう。
弟は何かを見上げていた。

「大丈夫?」

凜とした声が耳まで届く。

声の出所にあるのは、ワンピースの裾を風にはためかせる姿。威風堂々という言葉を体現したかの如き存在が目の前で背を見せていた。

言葉の体現者は、自分と然程変わらない年齢に見える容姿の少女だ。

ツインテールを宙に泳がせながら、彼女は振り向く。向けられるのは、刃の如く鋭い眼光。

だが身は不思議と萎縮しない。

何故か感じられる暖かみ。

そんな不可思議な視線で少女は私達を見据えていた。

「え……あ……」

「う、うううう！うわあ——ん！……」

私が何を言おうかと決めかねている内に弟が泣き出してしまった。しかも唐突に現れた少女に抱きついて、だ。つて、ずるいぞ！？

そのポジションは本来私のだぞコノヤロー！？

「大丈夫。もう、大丈夫」

少女は優しく弟を抱きしめ、背を撫でる。

弟は嗚咽を隠そうともせずただ少女に縋っていた。まるで弟を宥める姉の様だ。

本当なら私の役目だ。ウギギ。

しかし、と心中で前置きをして静かになった空間を見渡す。

「お、終わったのか……？」

「いや、まだ終わってはいないよ」

空気中に電撃が奔った様な衝撃が心臓を跳ね上げさせる。
弟には出せない年を経た男の出せる声が、確かに聞こえた。
恐怖に震える身体を鼓舞し、無理矢理首を動かす。
振り向いた先には、

「いやはや、まさかこの空間に乱入してくる人物が居るとはね……
予想外だよ」

無傷で身体に付いた埃を払う男が居た。

あまりの頑丈さに私は啞然としてしまう。

いやちよつと待て！さっきトラックに跳ね飛ばされた様な飛び方
してたる！？

なんで無傷なの？馬鹿なの？魔法なの？死ぬの？（私が）

「……」

だがそんな男の理不尽な頑丈さを見ても、少女は微塵も動揺しな
かった。

男の姿を視認すると同時に弟の背を優しく押し、私の方へ送って
きた。

私は少女を気にしながらも近づいて来る弟を抱きしめる。

それを確認すると少女は半身となり、構えを取った。

肘はやや曲げ、自身の顔の高さまで上げた右の掌を男に向ける。

左手は握り締め、腰の位置に置いていた構えだ。

戦うつもり、なのだろう。

「言葉はいらないか。ならば……」

対する男もファイティングポーズをとり、戦意を露にする。

「拳で語るのみといったところかね」

全身を異様な圧迫感が襲う。

重苦しい空気が私を押し潰す。

息が出来ない。

まるで喉を締め付けられてるかの様だ。

腕の中で弟が大きく震える。

自分がこんな状態なのだ。

弟が大丈夫な訳がない。

「だ、大丈夫……」

だが、その予想は裏切られる。

弟は身を震わせるものの決して苦しんではいなかった。

恐怖に息苦しさすら忘れているのかと思いきや、それは違う。

目を見張り、弟はその小さな両拳を握り締めていた。

全身から力を振り絞って向ける視線の先に居るのはツインテールの少女だ。

応援しているつもりなのだろう

誰かを応援する時、この仕草をする癖が弟にはあるのだ。

弟は恐怖を押し殺し、必死に少女の勝利を願っている。

ならば、姉たる私が震えている訳にはいかない。

頑張れ。

どこの誰かは知らない。

他力本願しか出来ず、本当に情けない。

だけど頑張ってくれとしか、私は言えない。

この戦いが終わったら私に出来る事なら何でもする。

だから頼む。

無力な私達を救ってくれ。

「その構えは何の拳法かね？」

「我流」

「成程。それにしても良い気の練りっぷりだ」

「ありがとう」

男と少女の会話の内容は和やかなものだが、実際の空気は緊迫したままだ。

お礼を言いつつも僅かにも揺るがぬ少女を見て、男は口元に笑みを浮かべる。

「では、そろそろ始めようか」
「ん」

戦闘開始の宣言。

少女の首肯。

2つの影が赤い大地の上を跳ぶ。

私達の命運をかけた戦いが今、始まった。

○

時は暫く前に戻る。

○

■ Side：転生者フィオネ・ランベルツ

其処は1人で暮らすには随分と広い部屋だった。

部屋の隅に大きなベッドやクローゼット、事務用のテーブルが配置されている。

ここはクルトの自室。

わたくしはその隅のベッドに腰掛けながら、荷物を纏めていた。武器や符等、戦闘に必要な最低限の準備は済ませた。

今はその他に使えるような物を探しているところだ。

見れば、クルトはわたくしに背を向けながら椅子に座り、刀の手入れをしている。

そういえばもう随分長い間抜いていなかったんですわね、と今更ながらに思う。

「こうして慌しいのも久しぶりですね……」

「ん？どうしたんですか、急に？」

呟く様な言葉にクルトが器用に椅子ごとコチラを向く。

その流れる様な動作に思わず苦笑しながら、

「いえ、思えば最近は何事もなく、平和だったのだな、と思いました」

「その代わりに水面下での情報戦がやたらと増えてましたけどねえ」
「それでも前々に比べたらコソコソやるのが主でしたし……」

ふむ、とクルトは手を止め、顎に手を当てる。

「久しぶりにタカミチとも会いましたし、昔を思い出しましたか？」

「それもあるかもしれませんわ。なんだか懐かしい感じですよ」
「まあ、”紅き翼”時代は毎日の様にドタバタとしていましたしねえ……」

「ふふ、休まる日なんてそうは無かったですし……でも、今思えば楽しい日々でした」

「いつもフィオネ君が私の背中に張り付いて盾にしていた記憶しかありませんが」

「そ、それは頼りにしているからですよ？」

「盾にしていた自覚はあるんですね……」

クルトの半目にわたくしは視線を逸らす事に対応。

一筋の汗が頬を伝うが、慌ててだなんていませんわよ？

そんな私の顔を見たからか、クルトも微笑し、

「既に彼らとは袂を分かちましたが……楽しくなかったといえは、嘘になりますね」

「本当に、懐かしいですわ……」

目を閉じて思い返すのはクルトとの出会い。

かつてわたくしは転生者としてこの世界に降り立った。

転生の切欠は世界にありふれたもので、若き身で病死した故だった。

そして白い空間で雫の様な形をしたやたらハイテンションな神と出会った。

彼の勧めで黒い玉集めを請け負い、適当な世界を選んで貰い、転生した。

そこまでは良かったのだ。

だが、転生した地は火と悲鳴の海の真っ只中であつた。

確かに見た目も行き先もランダムで、と言ったが流石にあれは酷

かった。

本当に死ぬかと思った。

實際死に掛けましたし。

わたくしの能力は『サポート技能全般の適性が高い』というものだ。

誰かの力になればと思い、この能力を付けて貰ったのだが、それが裏目に出た。

そんな能力では、1人で戦う事も出来ない。

兵士達に付近の村の人間と間違えられ、危うく捕まえられるトコロだった。

当時子どもだったわたくしは、恐怖と涙で顔をぐしゃぐしゃにしていたと思う。

恥ずかしい思い出なので、今でも根強く記憶に残ってる。

出来れば消えて欲しい思い出だが、その後と関連付く為、消す事も出来ない。

その後は、まあ、良く出来た物語の様で——王子様が助けに来てくれた。

表現的にはこれが正しいだろう。

その王子様というのが、目の前のクルトだ。

彼は間一髪といったところで修練中だった剣技を用いて私を救ってくれたのだ。

以来、わたくしは彼にくつついて行動していた。

身よりも無い事もあり、”紅き翼”の面々も快く迎えてくれた。皆優しく、そして頼もしい人々だった。

でもわたくしの中で一番は王子様こと、クルト様だった。

戦争が終結し、彼が”紅き翼”と袂を分かった時もわたくしは彼に付いて行った。

クルトとは、この世界におけるわたくしの全てなのだ。

この世界に生れ落ちて、死に掛けていたわたくしを救ってくれた存在。

彼の力になれるならば、どんな事だって出来ると自負している。
ぶっちゃけてしまえば、惚れてる。

どうしようもなく惚れているのだ。

彼の力になりたいがあまり、黒い玉集めが疎かになってしまっ
てはいるが、

『だいじょーぶ！そういうのもありっちゃよ！今を生きよ若人！』

『み、水神様……！』

後光を出しながらそんな風に言われたので、もう彼一筋だ。

クルトの何が良いと言われれば全てとわたくしは答えるだろう。

理知的な光を秘めた瞳。

鷹の様に鋭い目つき。

毎日セツトしている時に触れるあの髪感触。

大きく頼りがいのある身体つき。

それと後は――ああもうこれ以上は恥ずかしいですわ！

『ぶぺらっ！？』

『あら……？』

『……あ、帰ってきましたか、フィオネ君』

『あ、あらやだ、わたくしっいたらまた！？』

『ええ、見事なまでにトリップしていましたね』

『ク、クルト様、そういう時は止めてくださいまし！？』

『ハハハ。フィオネ君が可愛いらしくて、思わず見惚れてしまっ
ていましたよ』

『なっ、も、もうお上手ですわ、クルト様……！』

『もぎゅっ！へぶらぽべーっ！？』

恥ずかしくなり頬に両手を当てて体を振ると、下から悲鳴。
なんだろう、と足元を見れば、

……あら？何故水神様がその様なところに。

『お、思い切り踏んでおいて、見えてないっちゃね……我々にはごく褒美ですゲフウッ』

良く解らない事を言つて水神様は気絶した。

まあ、理解は出来ないがこの子にはよくある事だ。放っておこう。

「待ち合わせの時刻まで残り10分……ふむ。早めに行動しておきますか」

「落ち着いていますわね、クルト様？」

「フッフ、心中は凄まじいほどの暴風雨状態ですがね……」

後で覚悟しておきなさい、この計画に参加した議員共と彼は付け足す。

ウッフ、大丈夫ですわクルト様。もう摘発の準備してありますものの。

「しかし我が身を焦がす怒りよりもまずはアリ——村の方々を守る事を優先せねば」

「……クルト様、今アリ……と？」

「ハハハ、聞き間違えではないかな、フィオネ君。ほうら、そろそろ行かねばぐおっ」

「ふふふ」

クルトの襟首を掴んで笑顔を向ける。

なんでそんな青い顔をしますの？

大丈夫ですわ、わたくし、貴方への愛に溢れてますわよ？

でもまあ、まだそんな未練タラタラでしたのね？

全く。初恋の相手は既に人妻で行方不明ですよ？

しかもその娘といえはまだ1桁台の子どもですよ？
ロリコンですよ？

クルト様は愛をこじらせてロリコンになってしまわれたの？
そんな事になったらもぎますわよ？

おっと、そんな事思ってませんわよ？

大丈夫大丈夫。

ちよつとOHANASHIするだけですわ。
ウフフフフフフフフ。

「フィオネ君、ちよつ、待っ」

「大丈夫。5分だけですわ」

さあてまずは――。

○

■Side：クルト・ゲーデル

え？なんですかそれ？

え？魔法球？え？

ちよつ止めて下さい戦闘前に流石にそれはギャー！

○

■Side：転生者アスカ

丸描いて、線描いて、模様を描く。

鯛様の指示通りに右手から黒い粒子を零し床に陣を刻む。
なんか不思議な感じだなあ。

っと、いけないいけない。集中集中。

よし、出来た。

『うむ。魔法陣は完成じゃな。良い手際じゃ』

……あ、この辺り大丈夫かな？

『む？おお、良く気づいたのう。もうちょい内側にズラさんとな』

……ほいほい。じゃあ、消して修正つと……。

『しかし、まさかここまで急な展開になるとは予想外じゃなあ』

鯛様の漏らす言葉には同意せざるを得ない。

右肩の上で指示を出す鯛様が居なければどうなっていた事か。

ゲートが壊れたと聞いた時は危うく燃え尽きるところだったし。

……いや、本当にありがとう御座います、鯛様。

『ぬほほほ、もっと感謝しても良いんじゃないぞ！崇めよ！』

……感謝してるよ、うん。あ、それで次はどうすれば良いの？

『絶対感謝薄いよね、今の応答！？』

ハハハ、気のせいですよ。

『そうか、気のせいか。気のせいなら仕方ない』

……とりあえず言われた通り魔法陣描いたけど、準備はこれだけで
良いんですか？

ここはクルトの自宅もある高層ビルの屋上だ。

白の床石が張られた屋上の中央には黒い玉パワーで描いた魔法陣
が鎮座している。

魔法陣から溢れ出すのは禍々しい気配。

なんか魔物とかが今にも飛び出してきそうだ。

時折、黒い光が漏れ出しては粒子となり、周囲を照らす。

あれ、私以外が触っても大丈夫なのか。

『大丈夫大丈夫。基本的には無害じゃ』

鯛様が肩の上で跳ねる。

彼は魔法陣をもう一度見ると頷き、

『ここまで出来たらもう問題ないのう。後は適当に詠唱してくれば発動するぞい』

……詠唱？

何か発動の為の呪文とかがあるんだろうか。

言葉の続きを待つと、鯛様は急にかなりのイケメーンに顔を変化させ、

『一番良い中二詠唱を頼む』

……えっ。

『一番良い中二詠唱を頼む（真顔）』

いや、かつこまがおかつことじ、とか言われましても。

どういう事なの……。

『せっかく格好良い見せ場なんじゃからこう、良い感じに決めて欲しいんじゃない？』

クネクネしても可愛く——クッ！可愛い！

そ、そんな事されたって私中二的台詞なんてそんなに知りません

よ？

本当ですよ？ホン……ああ！黒歴史！黒歴史——ッ！

『いつぱいある臭いのう……』

……無いです！無いですから！

だから半目でコツチを見ないで下さい。

『自身の闇と向かい合う事も重要ってラカンも言ってた』

……闇の魔法とか使う予定無いですから！？

生前は色んなで作品でこれまた色々妄想したもんなあ、ウッフ。
ああいかん、暗黒面に染まる！この思考はカットカットカットオ
オオ！！！！

「ア、アスカ、いきなり地面転がり出したりして、大丈夫……？」

「……大丈夫」

って、そういえばラン達が居るんだった。

出来るだけ奇行は避けねば。

向けられているのは、心底心配そうな視線。

発信源は屋上の入り口前に居るラオとランだ。

大丈夫です。ちょっと黒歴史を刺激されただけなんです。

そうだ。

今は皆を送り届けるという大事な使命があるのだ。

黒歴史等に屈している場合ではない。

「あとは、詠唱するだけ……皆は？」

「ええっと、タカミチさんは精鋭さん達だけ？その人達を迎えに行ってるよ」

「もうビルの玄関前に居るっていう話だったし、そろそろ帰ってくるだろ」

順調に面子は集まってるみたいだ。

目を閉じ、額きを1つ。

十分とは言えないが、とてもありがたい援軍だ。
タカミチやクルトも居る。

油断は出来ないが、きっとこれなら村を救う事が出来る筈だ。
ここまで用意してくれたクルト達には感謝せねばなるまい。
ん？って、そういえば、

「クルトさん達、は？」

「コツチに向かつてるってさっき連絡があつたよー」
「なんかクルトはやたらやつれてたがな」

何があつたんスカ、クルトさん。

ともあれコチラに向かっているならば問題あるまい。

『じゃ、詠唱決めておくかのう』

……ああ！忘れてたのに！忘れてたのに！？

『ククク、逃げられんぞお！』

……フフフ、今なら私はダークサイドに堕ちれそうだよ！？

『自身の闇と以下略』

……闇の魔法とか以下略。

第9話 その手で掴め、幸せを！ハッピーエンドを返して貰いにきた！（前）

ここまで読んでくださった方々には最大限の感謝を。

だいぶ長くなってしまったので、今回は一旦ここで切らせていただきます。

冒頭の人物が誰？とかは次回、明らかに！

……って、殆どフィオネの過去話と冒頭で終わった気が、むうん。
ちよつとだけシリアス展開が続きますが、
悪魔襲撃編が終わったらハッスルする予定です……！

それでは、また次回！

感想などがありましたら、是非お願い致します！

第10話 その手で掴め、幸せを！ハッピーエンドを返して貰いに来た！（中）

一番良い詠唱を頼む

第10話 その手で掴め、幸せを！ハッピーエンドを返して貰いにきた！（中）

■Side：高畑・T・タカミチ

空を見上げれば、一面の黒に白が数多の点を穿っていた。

黒は夜空で、白は星だ。

澄んだ空気は夜空の輪郭を明確にしていた。

絶景かな。

寒いが。

非常に寒いが。

ふう。

冷やされ白くなった息を吐き出す。

季節は冬真っ盛り。

ポケットに突っ込んだ両手は無事だ。

だが、顔等の露出した部分はそうはいかない。

この冬に屋上という場所はかなり危険地帯だ。

上空というのは風が強く、地上よりも空気が冷えている。

容赦なくその場に居るものを襲う寒気。

身が僅かに震える。

ううむ、不動の体勢を保っていると芯まで凍えてしまいそうだ。

かといって、今、無駄な体力を使う訳にもいかない。

とりあえず気を紛らわす為、視線を下げ、首だけを動かして背後

を見る。

そこには重装甲の鎧に身を包んだクルト配下の精鋭が4名整列していた。

彼らは壁に沿って、横一列に並んでいる。

微動だにしない姿はまるで良く出来た石像の様だ。

だが、彼らの目には石像には在り得ない、感情の色があった。

鎧の隙間から見える瞳に含まれるのは驚の色だ。

それも仕方ない事か、と僕は苦笑する。

……この光景を見たら驚かずにはいられないよなあ。

視線を前方に戻す。

そこには1人の少女が佇んでいた。

頭の両サイドで長く伸ばされた髪を結った姿——アスカだ。

彼女は禍々しい黒の光を漏らす魔法陣へと五指を広げ、

「準備開始。」力」の充填」

一言呟いた。

瞬間、僅かに魔法陣から漏れる光が強さを増す。

奇妙な幾何学模様が刻まれた魔法陣が何の意味を持つのかは理解する事は出来ない。

されど、それが邪悪なものである事だけは僕にも理解が出来た。

大丈夫なのか、という疑念が沸くが中断させる訳にもいかない。

時間が無いのだ。

ここは彼女を信じるしかない。

それに邪悪な気配はあっても悪性ではないものなど見慣れてる。

主に最近、ちょっと別荘を貸して貰っている自称悪の魔法使いの元同級生とか。

良く難癖をつけに来つつも的確なアドバイスをくれる黒マント装備の金髪少女とか。

色々見かねて遂には実戦形式で修行をつけてくれる鬼畜吸血鬼の真祖とか。

修行が終わった後、問答無用で首筋に噛み付いて来る妙に大人びた姿の金髪——。

「なあ、なんかタカミチ、小刻みに震えてないか……？」

「む、武者震いだよ、きつと！」

「その割には顔が青くて白目剥いてんだが」

「そ、そういう武者震いの仕方もあるんじゃないかなあ!？」

ハハハ、大丈夫だよ、ラオ君、ラン君。

僕は大丈夫。うん、まだ大丈夫。

……しかし、僕以外はどうかだろうか。

クルトは利用出来ると判断したならば、悪性だろうと飲み干すだろう。

昔からの付き合いでそれは理解している。

故に彼がアス力を制止する事はないと断言出来た。

彼の部下である精鋭4人も彼の命令が無い限り、止めはしない筈だ。

……他の3人はどうだろうか？

クルトの横に並ぶ3人に目を向ける。

ラオは腕を組み、楽しげにアス力の様子を伺っていた。

ランは瞳をキラキラとさせてスゴイとか言っていた。

あ、うん。

この2人は全然大丈夫だ。

全く心配してないみたいだ。

というか凄い信頼のされっぷりだなアス力君。

続いて、フィオネを見る。

やたらと肌がデカテカとしていた。

対照的にクルトが凄まじくやつれてる。

もう1度、フィオネを見る。

頬に片手を当てて、凄い良い笑顔を浮かべていた。

やっぱり肌のハリが違う様な気がする。

「……」

「何も聞かないでくれ、タカミチ」

準備時間中に一体何があったんだ、クルト。

……む。

唐突に横つ面に風が押しつけられた。
視線をアスカへ向け直す。

「詠唱——開始」

彼女が背を向けたまま静かに告げた。

○

■Side: 転生者アスカ

「詠唱——開始」

声と共に魔法陣へと伸ばした腕に力を籠める。
目を閉じ、思い返すのは鯛様と共に創造せし破滅の呪文。

「私は、世界に要求する」

紡がれる言葉は今よりも若干流暢なものだ。

何故こんな時だけ口の動きが達者なのだ、マイボディ。

「望むは、世界を繋ぐ、一条の架け橋」

五指を僅かに曲げ、宙を掴む。

何も存在しない筈の空間。

されど、確かに何かを掴んだ感触があった。

「世界の主が、1柱と契約し、私は手を、差し出す」

魔法陣から噴出す光と風が強さと勢いを増す。

黒の粒子は屋上に収まり切らず、柵を超え、空を彩る。

「其は勇猛なる、戦士の話。其は大賢なる、魔法使いの、話」

脳裏に流れるのはネギまという漫画。

ただのフィクションであった世界が今此処に確かに在る。

胸に、これは現実なのだという事実を置く。

目を見開く。

「それはきっと、ハッピーエンドで、終わる物語」

五指を握り締める。

途端、抑え込まれていたものが開放された様に黒の光が弾ける。

漏れ出していた粒子等とは比べ物にならない量。

「だけど、私は更なる、幸いを望む」

天に昇るのは、黒の光柱。

圧倒的なまでの巨大さにも関わらず、眩しさは無い。

「私が求めるのは、誰も彼もが救われる、最高の終わり」

静かに落ち着いて詠唱を続ける。

鯛様が右肩の上で1回転する。

「だから、それを成す為、世界よ、応えて」

暴風が周囲を薙ぎ払い、私の髪を後方に吹き飛ばそうと靡かせる。

「私が、駆けるべき道を、此处に」

光柱の周りに無数の魔法陣が展開される。

どれもこれもが理解不能の、禍々しい気配を放つ陣だ。

鯛様を見れば、空中で回転しまくってる。

目が血走ってる。

なにあれ怖い。

「完成せよ」

世界が大きく鼓動を打つ様に震えた。

「ベストエンド・ワールドゲート」

光が、魔法陣が砕け散る。

『——ッ！』

世界を満たす黒が吼えた。

同時に世界に黒い雪が降り出す。

雪の如く舞い降るのは魔法陣を形成していた粒子。
更に視線を移動させれば、光柱が突き立っていた場所に――

大穴が開いていた。

まるで奈落の如く底無き穴が形成されていた。

達成感と成功した事への安堵感に思わず溜息が漏れる。

一仕事を終え、しかし、続けて皆へ指示を出す為に振り返る。

其処に在るのは、男女計9人の影だ。

皆、啞然とした顔を見せていた。

「……」

沈黙。

「……オホン」

唐突にクルトが精鋭4人へと顎を動かし、何らかの合図を送る。
合図に対し、精鋭4人は同時に頷いた。

4人の内、1人が残りのメンバーの前に出て両手を軽く上げる。
精鋭全員の意味が重なったところで、さんはい、と手を下ろし、

「……って下に向かって開くのかよ!?」「」「」

精鋭の皆さん良いツツコミだなあ。

というか底見えないけど大丈夫なのだろうか、コレ。

『大丈夫じゃよ。うむ。上手くいったようじゃのう。詠唱的な意味で』

……グハアッ！！！？

『フフフ、大丈夫じゃ。ちゃんと録画してあるぞい』

……やめたげてよお！！？

思わず吐血しちまったぜ。

後でその録画映像は削除な。

絶対だぞ。

「ア、アスカ！？」

「血がッ！？」

「そこまで負担が……！？今すぐ治癒を！」

ラオ、ラン、フィオネが走り寄って来る。

大丈夫。たかが黒歴史が1ページ追加されただけだ。

私はまだ負けてはいない。

「問題無い」

「アスカ君……」

「フィオネ君、彼女に治癒を。最低限で構いません。ラオ君、ラン君は準備を」

「なっ、ひ、酷いよクルトさん！？」

「お前……ッ！？」

「しかしクルト様……ッ！」

上がるは糾弾の叫び。

え。どうしてこんな陰悪な雰囲気になっているのですか。

「彼女の意味を無駄にする訳にはいきません。急ぎますよ」

「う……」

「……チツ」

「……そう、ですわね」

苦虫を噛み潰したかの様な表情の皆。

どうしたのですか、皆。

皆の様子に気をとられている内に、何時の間にか目の前にフィオネの姿が在った。

彼女は身を屈め、目線を私と同等の高さへ移動させる。

私の瞳に映る彼女の目は、真剣そのものだ。

思わず怯んでしまう。

あの。すいません。さっきのはただの冗談吐血で――。

が、その様な情けない事を言う訳にもいかず、

「治癒も、必要ない。もう、治った」

誤魔化す意味も含め、フィオネの伸ばして来た掌を押し返す。

「でも――」

心底心配そうなフィオネ。

万力に押し潰さるが如き精神的苦痛に良心が悲鳴を上げる。

が、冗談吐血なんて情けない事実を露呈させる事は出来ない。

意地があるのです、男の子には。

そんな私の心境を察したのか、水神様と鯛様がフィオネの両肩を叩く。

『大丈夫っちゃよ！この娘の身体にもう異常はないっちゃ！』

『うむ！ちよつと黒モゴモゴゴゴ』

ちよつと鯛様は黙りましょうか。

フッフ、後でOHANASHIしましょうね。

「……そうですか。しかし、無理は禁物ですわよ?」

「了解」

「ん」

眉尻を下げつつも立ち上がり、下がってくれる。

ほう、と一息。

助かった。

今フィオネに無駄な体力を使わせる訳にもいかないのだ。
穴の縁まで歩みを進める。

隣には白い体毛を風に靡かせるラオが立っている。

彼は私を見下ろしながら、

「それでこれからどうするんだ、アスカ?」

「飛び込んで」

「えっ」

「思い切り、飛び込んで」

「えっ」

「ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷ、かーるいす」

「なにそれこわい」

ラオ、確かにあの穴は怖い。

だが勇者の気持ちになって飛び込んでみて欲しい。
僅かな勇気が道を切り開く力となるのだから。

って、いかん。補足しておかねば。

「ただ、降りるとすぐに、戦闘になると、思う」

「どういう事ですか？」

私の言葉に、底を見極めようと穴の縁に腰を下ろすクルトが疑問を投げかけてくる。

彼の疑念に対して私は頷きを1つ。

「ウェールズで、強い魔力を、発している場所でも、怪しい所を着地点に、した」

「成程。計画の1時間前ともなれば——」

「儀式に必要な魔力の展開が始まっているという訳ですね？」

「その通り」

タカミチの言葉を引き継いで頷いたクルト。

2人に親指を立てて、正解を示す。

そんな私の様子に彼らは微笑。

な、何が可笑しいのですか、ぐぬぬ。

やはり幼女ボディでは微笑ましく見えてしまうのか。そうなのか。恥ずかしさで顔が熱過ぎる。

穴があつたら入りたい。

——って、大穴があるではないか。

というわけで、

「まず、私が、降りる。皆は、ついて来て」

宣言すると同時に皆と視線を交換し、それから地面を蹴り、跳ぶ。目標地点は穴の中央。

フワリ、と身が僅かに浮いた後——、

「んっ」

私の身体は黒い粒子となって分解された。

。

■Side：悪魔召喚士

木々がそれぞれの葉を擦り合わせ、一種の音楽を生み出す。
俺はそんな天然の演奏会場の中央に立っていた。
空を見上げれば丸い月が俺達を見下ろしている。

良い景色だ。感動的だな。だが無意味だ。

口に加えていた煙草を指で挟み、抜き、煙を吐き出す。

仕事の”再開”まで後数分。

これから大量の下級悪魔の召喚儀式が始まる。

目標は齡3、4歳の子どもだという。

金で雇われた俺達が思う事でもないだろうが、不憫な事だ。

まさかMM元老院から狙われるとはな。

……ま、世の中そんな不条理ばかりさ。

煙を再度吐き出すと、部下の1人である男が俺に向かって近づいて来た。

どうやら召喚の準備が整った様だ。

煙草を捨て、踏み潰す。

すまん。英雄の子ども達よ。

恨むなどと言わんが、これも仕事だ。

「では、とっておきの駄目押しと行こうか」
「ハッ！」

把握する事すら億劫な数の部下が了承の意を口にする。
良い返事だ。

「召喚陣に生贄を——むっ!？」

唐突に背筋を伝う、悪寒。
何事かと背後へと振り向く。

「黒い、穴？」

其処には黒の粒子が湧き出る穴が在った。
目を見開く。
何だこれは。

先程までこの様な穴は無かった筈だ。
疑問に頭が混乱する。
拙い。

予想外の事態だ。
まさか召喚陣の暴走か。
否。

その類であるならば、俺に解らない筈が無い。
なればこれはもつと別の物だ。
とにかく、距離を取らねば。
今、穴の位置は俺の真後ろ。
何が飛び出てくるか解ったものでは——、

「むう!？」

瞬間、突風が俺の背を押す。
転ばぬ様に地面を踏みしめた時、それは見えた。

粒子が集まる。

再構成される。

それは幼き姿の人型だった。

橙色の長髪を、頭の両サイドで結った髪型の少女であった。

そしてそれは身を捻り――、

「そおい」

「プゲロバァ―― ツ!？」

「『『『リーダァ――

―― ツ!？』『』『――

この俺の右頬に容赦なく右ストレートをぶち込む漢女であった。

第10話 その手で掴め、幸せを！ハッピーエンドを返して貰いにきた！（中）

悪魔召喚士は犠牲になったのだ……。

展開を早める為、そしてオチ要員となる為にな……。

ここまで見てくださり、ありがとうございました！

読者の皆様には最大限の感謝を。

中二詠唱って難しい……！

なんかアスカの目標をそのまま言葉にした様になってしまいました。

しかし進みが遅い。

次回こそ、次回こそはネギ・アリス救出編でお送りします！

■悪魔召喚士＋少し前に出た茶髪メイドさん

> i 3 8 7 6 1 — 4 5 1 4 <

悪魔召喚士さんは今回不意を突かれましたが、

真正面から戦えば”本物”レベルの実力者という設定だったりも……。

…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9696y/>

ネギまでクロニクル！～いざいけ！平穏なる世界！～

2012年1月10日02時47分発行